日本俳句

新年號

第一卷第八號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和二十年一月三十日一年月一回刊行

昭和二十年一月二十五日印刷納本

みいくさ集

日本光榮あり多木は多木にて立てり　山田蒲公英

地の果もゆくこゝろ野菊花さけば車上の兵ら　谷しんいち

枯野原の枯草から屈進す兵にある前方　龍田眞魚

これに馬をひきだすうつくしく一帶氷樹　本間昇

枯野起伏枯萱突きぬけ第二第三分隊　大淵青柴

山河雪降りつゝわが家ゆ征く　高橋日東子

教へ子大川伍長の忠靈に

神風隊の君を偲ぶこの教室いつぱい多陽照る　文生

日に新に覺悟多の山を見る　相澤華芳

生產陣一兵としてのこゝろ小菊のいろ　林鷺水城

少年空につゞかんとする山茶花咲く白し　中根尉策

空襲恐れないそのやうあきらかに冬の芒　守矢自由也

けさ霜中の馬手入する兵ながい外套　村上芳男

燒夷彈しとめた人そこに坐り多の菊がある　細谷不句

石垣なみなみ石光る校庭の一番出勤　園木六食子

土地改良で吾らもゆく體當り寒ン耕ち　濱名白香

吹きとぶ落葉げに體當り訓練々習機　英吉更

農會のをぢさんに賴んで見る鶴嘴ならよい　井出臺水

鷄頭の冬ざれて來たのも絶やさぬ轟音の中　村尾草樹

おむすびの味噌の中の母の味が暖かい（復職）　木村梨雪

仕上げ丁寧にする明日は彈丸となれ（隣組作業）　赤星圭伊子
友の無口も唄ひ唄つて空に征つた　相馬御風
この日あつて此の誓ひ我が胸に應徴のマーク　翠
殘業の顏のほてりに星の寒風がこころよい
芋の葉も食べて二百十日平穩　川上正男
寒夜の戰闘姿勢ここに空守る兵　森抱葉
あの頃の母のふところのぬくもりの防空頭巾　西垣碧水
元旦安靜に噛んでかんでめし食ふがよし（決戰昭和廿年）　奥村そのえ
みたま白くつつまれてかへるふるさと山もまつしろ　河合英觀
お燒香母にひかれて勇士の父ををがみます山茶花　平松星童
英靈を迎へ夕月が光もつ頃の山に雪がきてゐる　高本三露
阿蘇が秋晴れて征く日がちかい毎日稻刈る　津田笹彦
顏がまだみえる旗がまだみえる旗を振れすすきの穗　白石默忍禱
富士がよう見える敵機がよう見える激奮　片岡樹裏人
國津神に大根汁秋の戰をまもらせ給へ　平岡國次郎
夫は海に子は空に何やら白い花と秣など　原蝦煎子
大本營發表のあとしばらくはこほろぎしづかになき　木戸夢郎
國こぞるいくさぞ査閱の奉公袋もち朴の木おちば　木村綠平
盲爆であつたこともみぞそばの花に雨上つてゐる道　高橋良太郎
みちのく多木の昏れしづみたる大本營發表　鈴木折嶺
月光をとんで征く機の神々に續く神々　和田光利
敵機何ぞ多に入る山河富士嚴然　內島北琅
秋山秋紅蓼

俳句日本作品

選句錄

○井泉水選

看護婦さんの白い影かよコスモスかよ　中村五倍子

血を吐くことにもなれてきて月が明るすぎる　髭もじやの顔と純白のシーツと手鏡にうつしては秋

雜木がもみぢしてゐた話や顔ふいてくれてゐる　岩に潮さゐの灘は時雨雲の陽のさす彼方豐前豐後

すすき原は雨ふる日の沖のひきふね　田から見え風呂たくけむりが我が家の雜木紅葉

お日和もいよいよ本ぎまり少年と母親せつせと稻こき

一日警報出ずに月の出たやねやね月夜になる　關根ふさ子

多木立窒にたくましい東部軍情報聽きもらすまいとする

何はなくとも松の一枝色濃くしてあり戰時新春

赤ちやんのねがほ警報のあかり暗くする

床やのとなり靴屋に菊の花きいろくて晩秋

もつと聞きたいことの南天の實に陽が殘つてゐる

働いて心みち錄音放送の角力が時間いつぱい

母の手づくりこの多かすり模樣のたびをはくよろし

としより耳よりなはなしの耳がかゆくて春

あたたかく花の蜂をいれてゐる

春がまだ枯木とこはれたベンチと猿が網のなか

さかりをすぎて花のまだつぼみの二つ三つを咲く　土居曙子

みちみち野菊母を送つてかへる

このごろ冷々となつて朝は番茶の傷兵として

甘藷がとれてゐる少女がお留守居の農家にきてゐる

病めば愛情を感じ易く菊の花靜かな雨ふる　鹽田正吾

うめもどき陽がさせば障子日南

暮れると明星になる多木と遠く林のある

麥の芽も落葉するのも夕日のしづかさになる

あめのふるほどはいつもの木にふるふゆ　御井弓弦

朝を掃きて門の銀杏の夕の銀杏は踏みて歸る

ヒマ採りをへて山茶花の一枝截りて持ち

酢工場の窓の夕映や田の中の道にして酢のにほひ

あるもので日のとどくところせひるの白い茶碗　菅崎道雄

昨日のやうなけふの雀が二羽屋根の雨ぬれてゐる

病牀六尺よんでしまひ秋窒の深さ仰臥してゐる

ポストのところを曲ると疎開あとのはたけけふ雨ふる

でむしつのだしてゐ午後のラジオ體操音樂はれてくる　横瀨碧山子

もうすつかり刈りとつてわらやとわらや暖し

みんな飛び立つてしまつたやうな教室にひとり秋晴

水たまりに落ちてゐるいてふの葉青い空

波狀爆撃で來たといふ雲の多い夜の月あかり　岡本秀之

八つ手の花ちよつと綻び縫つてもらつて

並木落葉して救護所の標しが少し坂になる處

妻も讀物があつてさらさら散つて木の葉で

烏瓜いろづいてゐるおだやかな風バスは停らずに行く　淺野智秋

鐵屑の山一寸した空地がペンペン草の空の夕燒

鋪道は十一月の糠雨横穴墳の土の匂ひも

風に鱗雲も池はさざなみ立つてゐる秋
クレーンゆるぎだし運河ひろ〳〵爽かに譲
さむればさむかぜ熔接のスパーク秋の透明　桐井靖夫
警報の後の秋の鴉が船臺の槌音
我も汝も征くのみ夕陽のみやしろ葉が散る
降つてひるから晴れてうつくしい裏の山今日も征く蹕　堀切春扇
銀杏には風が來る雲が來る秋が來る
枯れてしまふと日がさして角のポスト
底石見えるほどな水に紅葉してゐる
こんもり森がある方へ道が一本月が出る
父の言ふ事わかる年になり疊に秋の夜を感ず
秋の日はガラス窓に葉のない青桐　印南健治
口笛もこのごろの軍歌、冬木朝の日がさす
ここら水音のする山すそ紅葉してゐるところ　青鷹香
生駒の山並に冬近い雲かかり編隊南へ南へとゆく
秋の日様々の小鳥鳴いてゐる山に奉仕に來てゐる
すずめ生れてゐるぬくい日の屋根で鳴いてゐる
山々もみぢしてゐると山崎あたり驛の櫻紅葉　梶本芦城
ここで芽を出してゐる水仙な
ひるからは風が出ておて草の實
熱ある朝の赤い梅干多になる
山裾の家もちよつとかすんでゐるなど年がくれる　廣橋鋼一
まい。ていつた畑から豆けさも又一つ、便りに書く
このごろ障子たてて雀外で鳴いてあたたかい
息が凍る朝の霜朝日にしづくしい　菅無極
で立つ日を前に親と子座敷にゐて稻の穗波
雀騒いでゐる夕日が南天の實の赤く

社頭寒梅いまだ開かず翌は出て征く　水野田々詩
凍つた朝の町の道牛を鳴かせて通る
白壁塀に添うた猪道多が來てゐる　吉村しをり
武運お祈りして杉の太いよいお宮さまである
征かれた夜も星空の霜となる冷えやう
沼田のつづき稻刈り殘して冷たい雨になつてゐる　重村順孝
退けてからの校庭のもみぢ先生お一人當直
菓子組合の看板日の當つて雪どけ乾いてゐる
買へたキヤベツをふりわけにして坂がくれての月夜のみち　加藤白水境
けさは公孫樹のすつきり高い空から落葉石の段々
さくらもみぢして男の子のあるほしもの乾いてゐる
一日休ませていただいた障子の多日一ぱい　澤木昭二
岩うつ濤のこんなところも畑で麥の芽
おちば掃いてからのおちばが夕日になつてゐる
女工員ら機械に禮してかへつたあとの多赤い椿　谷口晃男
空が澄んで泥の手から苗もらうてゐる
刈田に紅葉山の演習砲のとどろき渡り
乳房のやうな南天の實の房に雨はれた雨だれたれ
すつかりほうけた薄野のあたたかなてふてふ
枯れるものは枯らしてずうつと廣い原に牛ゐる
きのふよりずつと寒くて用水桶の水にある空
同宿の友と寢る前の蜜柑あまくて寢る
本日映畫ありと掲示されてゐる冬木雨晴れ
憩へば道の遠きを紅葉のその紅葉を
風が師走の防空頭巾の子供達です
月があつて雪が降つてゐるこんな夜の警戒警報
瀬の音が樋の口橋とあつて稻は刈つてゐる

日の短くなつたことを雨のふりつづくいものつる　内藤英夫
月が木が枯木になつてゐるかげ　竹内孤明
車内は一家と標示してあたたかな日ざしを窓に
窓に日のさえざえと寒い影にしてかへる　萩原和夫
鈴音時雨れては馬車の林にはいりゆく　西本イチ
葉雞頭のしみじみ秋はよしと思ふ間も戰つてゐる
南を北に神兵を思ひこうこう雪に照る月を歩く　吉川哲男
多あたたかな陽が妻がほしてゐる白菜
岩にいでゆの峰の白雲飛んでゐる
ふうふで病んでひとりのこつてお月さま　岡田花野
散つてまいにて散つてしまつてしぐれてゐる
春の遠山暮れてゐるひとりのてすり
毎日水仙伸びゆく程な年はつまり　福本逸子
大根白う干して大根へ紅葉が散るほど
病んで陽が窓のすみまでとかうとしてゐる
警報解除しらせる聲がこだまするお月夜　鈴木治
落下生食ひ乍ら讀んでゐた葉書で皮捨てとる
日のさせば細いにれの小枝雪とけてゐる
友は征つたその寫眞と關の實がこれ
から馬車追はれるやうな夕日刈入すみさうな　小島胡市
一面鋤かれて入日となる牛のしつぽ
だいてすんなりぬけて秋も終りさうな
夫婦日々つつましく黄菊庭に咲いてゐる
足元まるいあかりが落葉かさこそ多になる　三井不二雄
藤棚多になつた日のかげ畫をかく人がゐる
みんな達者で雨が雪となる夜の盧はた
窓も春なら木々も春一年生歌つて通る　佐藤忠美

おひる前の體操よく揃ひ秋の日のその中の僕　内田久子
大根洗つてゐるに道きく大根の白さかな　川口雅子
まだ寢てゐる村の上の山が明けかけてゐる　梁瀬阿羅興
毎日戻り遲くて柊の花今朝は散つてゐる　河崎櫻桃子
癒ゆる日の遠いことのコスモス風に搖れるのも　富田南龍子
半島さんの子と内地の子とゐて鐵山の窓柿實る
癒ゆる日まで待つことにして南瓜の種
まつたく細い潛水艦が港の口にゐるけふ多の雨
空襲警報夜になり山のはつきり見えてゐる雨
せきれい磯へくる日の日のさしてゐぬ雨
ペーチカの溫度が蠅を遊ばせるほどな雪景色
もう逢へなくなる友とこの道の降る木の葉
落葉の巡察の月光を踏んで通る　森景諫郎
踏切番のをばさん袴巻してゐる柿の木の葉
線路のすすきがほほけてゐる白い雲
白菊少しさして久しぶりの友のやつぱり痩せてゐる
想ふたことの想ふたままで居る秋草の赤さに
大根の白さ並べて干してひるはひとりゐる
鳥瓜は藪に赤くて歩くことのたのしくて歩く
天突き運動の掛聲勇しく確かに秋冷の候
軍裝しつくりと君も征く氷雨の降る
蟲の聲もしげしげと佛の膳の湯氣
多近い山の色の學校は晝休み雨
警報が出てゐるお寺の屋根の今夜は月夜
吊し柿あたたかく又子供が來てゐる
海と棒の花のさき樣に朝のないでゐる
此頃さびしい大通りの夕暮こどもが泣いてゐる

遠い山なみの一つには日がさし京も町はづれの多

山は蜜柑の秋である海の島が一つ　篠崎鳩坊

このへんどこも蜜柑の木のみかんトンネル出ると海の青く

車を引いて一日母とお茶の花ふるさと

多川の橋があつて竹藪のたけ　藤原豊

うすい雑誌ひろげて多の日電車を待つてゐる

大きな月が松は松がもう多　鈴木單衣女

雪空は梢の明るい小枝小枝の先

少し洩れる灯に警報今夜もちらちらする　廣田路一

石灰焼小屋の傾きやうも朝の日多の海

山内は紅葉に佛事は終へて暮るるにいとま　足立桂舟

新嘗の祝詞である山茶花も咲いて

何時までも殘つてゐる柿の青空　池田隆藏

なんとかしなくちやならない月夜の道が續いてゐる

この道をまた踏むものか空が氷つてゐる　久本野英麿

薄の穂も戰時資材に、山の雨は小やみに明るく

阿蘇の煙もけふ風ぎきつて稲こいでゐる人達　中西國友

道がわかれるところの草の實地藏様のよだれかけ

白い兎の世話などしてゐる療養所の霜がとけるじふん　印南一可

祭はやしの方へ道が一本月が出る

遠く白い富士が晴れてゐる稲架に稲がけてゐる　酒井健之

雪べ警報とけても灯を暗くしてゐて藁うつ音

けふも山から雪になる防火用具はそろへておく　鈴木綾子

電柱がずうつと麥田の麥蒔いてゐるその影も

ここから隣村になる木の橋しろい霜　藤川白涼

靄になつて暮れて四五軒の灯である水音

流れてゐるほどの水で枯あしが折れてゐる

男の子三人木の實猟樂寒の柿　近藤麿三

解除のサイレン鳴つてゐる籾干してゐる日ざし

梅の實の落ちる音屋根の草に風がある　高安朝吹

こんなに痩せてしまつたベッドへ砂の路歩いて妻がきた

西雲や體温器もつ細い手がシャツから出てゐる　佐藤葵芳

母のゐてくれるひととき春がくれば咲く木が窓に

手紙は書いてしまつた山茶花暮れてゐる　谷雨滴

この道は物置へ行く櫻の多芽

その建物も黒く塗られて飛行雲の曲線　安田爐中火

けふも犬をつれてゐる銅像が落葉一しきり降る

みそ汁のこれは間引した菜の青さいただく　西岡葉子

貨車らしい音が遠のいてから冬夜の拍子木の音

汽車から眺めて古里多の山々通つてしまふ　日野素木

雨はれたので奥さん一寸菜を間引きに出てゐる雛

雪朝のコップの水の透明なのを(北支)　眞野たける

古い手帳のページとこれは内地の春の花押花

ばくおんが屋根の草の穂にある風　下田麥

校庭芋畑にした芋の葉日曜も授業してゐる

營舎ねしづまつてゐる木の幹月夜(濠北)　新村和也

内地は冬であらう月に口笛ふいて白服でゐる

雨になりさうな闇からカンテラ揺れてくる　倉前忠勝

そこだけが一日陽當りの諸や大根干してある

お寺と隣りあふて木の枝月夜になる　栗田白夢

枝の雪がくづれる星が山に出る

霜どけの下駄の泥おとして道が村道になる　龍川安彦

多枯れた藪の向ふに線路があるときどき通る音

急に寒さがきて藪の竹いちにち鳴り　栗田千可志

冬園ひできた藁家の裏山落葉かいてゐる　加藤隆
小道があると自轉車も通る秋雲釣竿もつても通る　矢島寒雄
月夜子供のものなど干してあつて下が菜畑で　古城白鷺
夜明けて白い雪がふる白い冬がきた屋根　菅原裸歩
みがいたホヤのランプが明るいろばたで一そく作る　寺尾白面郎
葉の落ちた木まだ葉のある木のそば寮の壕掘る　松尾秋浦
旋盤が鐵を削る何か樂しく夕映えてゐる窓　市川滿哉
ちよつとした畝に双葉とてゐなさるとしより夫婦で　竹谷正勝
ことしは蔓を這はせておく土手がずうつと線路工夫さん　米田蟾華
今晩警報まだ出ない療養所の白い煙突　田中一路
月が白い雲を持つスイッチは切らないままにおく　柴正太郎
防空頭巾の影が壁に寒くて大きい莫すふてゐる　永田潤
壕を出て空氣を吸ふ京濱上空に敵機なしといふ　能智愛子
明るい空に星と月とみかんをさげる私と　肥田案山子
軍歌が聞えて來て遠くなつて何處までも稻田の道　中島義光
水車こつとんこつとん廻つてゐるだけ烏瓜　東信太郎
砂の貝がら海がみえてくるなみ　加藤鶯杉子
木犀の花やねの陽がぬくい猫がゐる
一日田圃がはれてゐたわらんぢの足洗つてゐる
一軒の藁屋根と待避壕と柿の冬木の下
もくせいのはな水汲んでゆく
雨の日は床屋さんガラス戸の中の鉢の菊
しんかんと月かかり食堂の煙突がもう煙だしてゐる
土が凍つてゐる建てる音がきこえてくる
いつもある窓の松の木が雪になる檢溫時間
道行く皆防空頭巾である道のいてふおちば
雪のせたまま重たい汽車が通る自轉車下りて待つ

小さな火が赤いのが冬の夜である机のそば
冬朝をその機械いつもの如く怪は征く君であつて
傘借りて出て道の草にも降つてゐる
風が秋になつた叉銃線の白い蝶々
秋雲へちよつと着物で看護婦さんおしろいの花
野菊を折つて歩いてきてけふは熱がない
煙は落葉焚いてゐる母の姿見ゆる
着いて馬が喰む青い草があるポケットに煙草がある
富士晴れて冬、友軍機の翼なり
茜さす夕空くすべる煙

○ 卍禪子選

柿は澁くて三人が三人同じ顏の秋燈　佐藤鳴風子
暗闇の耳に打つ鐘近し脚絆巻き急ぐ
林間この徑出るところへ出よう杖をひく獨り
さわやかな香水を嗅げりお嫁さん頭さげて
青い刈田と青空の水平に奉仕旗立て晝のおにぎり　藤下ふさ
日の本のいくところ翁のみ魂澄刺生きてあれ（田庭翁追悼）
碧澄める山の端無村の繪にも似て鄉愁が湧く
病に臥しつ師走の或夜ほのかな胎動を感じ
召されて枯柴の曖く陽のある　佐藤吟雨
壕掘る冬木立に川邊の朝雲
初雪にたるむ電線が加工場の煙突
一日降つた雨が星の夜となつて初冬へ
青空は何事も無かつた様な空襲警報解除　吉岡久藏

不敵なる表情十二機編隊あれが敵機（〇〇工場にて）

ふるさとはすつかり枯れてゐて車窓の山　木村翠雪

兵達の基本體操の聲きこえてくる吹雪の中

どの家もどの家もみな警報の月夜　佐藤大峰

久々の叔母を褥明りに小麥挽いてゐて

山も窮まつて水も窮まつてこの高い高さ

じつと蛛蜘らしく月夜の月を吸つてゐる　鷹合めぐみ

泣かないと心にきめても箸持つ手に涙す（從兄戰死）

親族わづか集りあの夜のいさをしを語合つて

手風琴が形見となつて今宵の秋を私が奏でる

遺影掲げ室の冷さ花を活けても見る

清々しい月夜だ廊下に柚子の葉影　佐藤厚吉

午前三時といふ柚子の樹の下で飯たく

はつ霜の朝の途掌がつめたくすべ〳〵する　清水ちゑ

凍つた道に來て足音家の壁にこだまし

看護つかれふと小蟲の行方を見つめる

多の夜の獨居は鏡がつめたく反射してゐる

山門の月影けふの落葉が土にある　大森古天

雜草の山は寂かな落葉となつてゐる

落葉して明るき山へうつ柏手　高橋長太郎

ひと荒れごと秋は逝く浪音

殘業すませて歸るみちが野菊の月

浪音もう子等馳けだしてゐた　鎌田一相

この夜靜かに北のますらをとして征でたつ

みいくさを祈る神垣靄の立ち

一句殘してゆけるますらを憶ふてゐる冬の夜

脚の先から暮れて行く枯野の陽　久保田和磨

晝の陽枯野の續く限り豐か　木村翠雪

小春の陽額にかゆく黒土匂ふ

神風の鉢巻締めなほし殘業の箸をとる　赤星圭伊子

窓に征つた友の決意繪葉書にあふれ秋晴

山茶花の白い青空敵機墜ちてゆく　北山公平

寢冷えさすまい夜半の壕に子の深いねむり

爆音に雨が途切れる壕の中憎しみ　岩田安子

燃えのあかさ敵愾心に燃える眼と眼

征く人を送つて暗い道を歸つて來る

雨がボタ雪となつて赤ん坊泣いてゐる　山本吉美

いつかガソリンの香にもなれ澤黄ばんでゐる

休電日登校する秋櫻匂つてゐる

机の疵もなつかしく講義きいてゐる休電日　加賀谷廣子

友の置手紙立つたまま讀む蟲のもう鳴かぬ部屋

ふるさとの友を偲ぶ夜業の窓星が流れ

朝顔の小さくなつたこの頃家に便りしてゐる　高内千代子

相模の空けふも暮れて庭のコスモス

ふるさとの雪を語り合ひこんな夜の火鉢かこんで

初霜今朝は竈のよく燃える煙を見つめる　西垣碧水

あるは幼き思ひ共に酌む酒近く征くもの（弟出征）

山の淋し林を行けば足もとの落葉　志村保子

薪木ひろひだお山に登らう大詔奉戴日の

こんもり茂つた杉林だ枯草を踏みしめる　瀧脇愛子

自轉車で電報兄さんが凱旋す　余川珠江

互ひの幸を祈り合ひ君は征く眞上の滿月

船が來る朝靄岸を滿水にしてゐる　相馬紺翠

銀河あざやかな流れ戰地の友を祈る　渡邊まき子

黒田三千男

○ 一碧樓選

兵舎に出口があり明るく雪へ降る雪　本間昇

我ら必勝のかまへ秋空へむけて砲口　村上芳男

赤い花咲いた蔭あるまゝに霙れる　澤渡尚之

砲聲はるかに轟き實のある草々　村上呂半

霜柱ふむ我らに大き山襞　藤田三六亭

霜朝のよろこびみえて沖の島々　三雲城東

二人が肩がそろふ夜霧山をつゝんでしまふ　井上星樹

朝霧晴る〻油井一つ二つひく〻　中塚檀

馬を洗ふ水の中枯れて水草　矢崎博敏

霜とける枯草まだ青いを食ふ牛　伊藤彌太

居れば鳥がくる霜きえぬ山かげ　佐藤保民

ふぶけばなにもかも見えず我前の大木　島林庄作

ふるさとの多山を眺めるわが身を感じ

我にやゝひくゝ刈田山立つながめ

雪なれば友なれば語る八大山人のこと

ふるさとの雪が白い街が古い夜の道

流る〻水ありて刈田日いづる

のこりの葉ありて木の枝うごく雲うすあかり

山茶花は花多く雲きれてくる

朝は光のかげの多ばらきつてくる吾子は

農人にありあきらかに刈田の水

海に殘る多の陽濱砂ふんでゆく

冬となる海のいろ松枝一方へひく〻

凡人凡様そのやう野菊のかげある

ひと時霽れては吹雪き蓬葉をつけて雪中

雪朝彼方へ馬駈けてゆく馬橇

こゝの建物の長となり蓬枯れた音身近に

山墓地歩きたくまだら雪殘る道なるに

庭多構へ種おろしたばかりの畝あり

前山ひといろにくすみうしろ雪の輝る山

學徒行進頭に肩に雪積める

樹々の枝に雪あり昏れのこる枝々

霙が長靴をうつ人うしろにもつゞく

雪圍の窓より覗く峰々の雪

墓場掃く音の多荣白い島

レンズ磨きの輝の手つきのをみな窓明り

國を擧げて戰力葱の雪ふかき畑

兵ら薪はこぶ顔々霰ふり來る

爐べにきく戰果だいこん輪切りにし家内

野菜いくらか圍ひ藁家雪ふれり

大戰果きく木につぶ〳〵照りて蜜の實

ぐん〳〵とぶ鳥あり大空雲われて秋夕

少女ひとりが立ちし木に青い柚子の實

菊の花摘む海靄のなか動く太陽

嬰兒明るい方へむく室の一隅の小菊の鉢

鱈の白い腹みせてある船底へ降る雪

多の日林への徑あり草にかげあり

山道山が重なる馬が正しく歩む秋の日

稻架のある風景で坐つて飯盒出した

我が馬雨にぬれる此處に木々紅葉して

窓一ぱいの海の面秋の蝶とんでくる　平井青三
表山廬紅葉戰果日々あがり　齋藤浪也
山々溪々の紅葉石工一心石をうてり　開墾男も女も遠く多の海鳴り
山や日のかげりし山の家多の日　秋雲遠くあり食堂一齊食前合掌　鈴木一斗谷
住みて枇杷と八つ手の花咲きし軒　大銀杏黄葉へ日照り敵機見えし空　金内錫四
母と葱を揃へる多の夜灯の下　多朝白い鳥來ては浮いてゐる橋際　新田巢州
いも掘ればまつくらになり子を車にのせ　林檎のいろ日ざしに母と坐りて　村上幸吉
しぐれて來る前に稻をこぎ終り若人等　松葉杖の兵として八つ手白い花　金子璧人
少年かやの穗をとりに來て秋雨一時上り　一隊をうごかし霜地草に穗あり　佐藤西呂
工員の後ろについて行く樽内落葉してゐる　霜朝いま受話機きつちりおき枯山に對す　中野健三
間近に鵜の居る海うねり高い浪　芽麥の一線一線征く日近づき　中川尚三
朝まだ時化やまずゐる大根を煮る　決戰多夜の星整然を見る　工藤折葉
子と荷ふ砂の重さいつものやう明るくて多海　霜朝愉しくそよぐ合歡の實が椎　高橋日東子
稻を背に農人話ある或は日照り日かげり　子ら雪を呼ぶ仰いで呼ぶ子らの顏　龍浪龍雄
子らと黄しめじの汗いたくに夜に入る　うごかぬ雲に隣り圓い峠山枯いろ　吉田五安
袋へがさ〳〵蝗とつて畦もみぢ　神社への道かた側松林多の雨ふり　古田純三
敵機侵入をおもふ壕に近く八つ手花咲き　芋と小麥の增收そしてお互の子供の話多の日好日　坂岸蛙保
傷兵としてくらす日に日にもみおする前庭　國土磐石山に雪ありて此街冷え〳〵
枯野徑行くつゞく兵等に赤き野ばらの實　この時われらに山の上から明けて冬の山々
小隊叉銃解く地に霰すぎし地をふみ　銀杏葉がはら〳〵ちるころの歸還わがくらし
大詔拜する三たび雪つのる中を部隊集結　歸還小菊の花が壺に白きこの夜
剪定終りし梨畑この日青い空　多日かげるともなく牛を牽く
寒菊蕾あり雲に低き爆音　多の夜空白し荒浪碎けては岩
山深し山越えて來しこゝに蕎麥の秋　空は雲厚い人が打返し多田
雪空から星が見える河原の道　そのやうに暮れて雪ある山の斜面
勝關雪の谷間の正午こだま　夕日照りて小麥畑中の小溝
われら作業衣雪に濡れない　地に伏す銃口に觸る〳〵草觸る〳〵夏草

ひつそり晝休みの冷ゆる機體　不破默平
働くよろこび大根に丸さあり　有米飛路
鋲打つ音やまず赤い菊の鉢おいてあり　伊東秋轟
子供らの聲が似てゐる子供らに日暮が早い　渡部杏甫
兵一分隊が穗草の中風つよし　田邊芳香樓
刻々日沒稻架かわく風　中村昌作
刈田の道はつきり野茨の實は固き　島田啓生
かたまつて野菊咲いてゐる僕こゝに釣る　大野銀兵
銀翼一機迅し刈田の空ひろびろし　高澤妙鬼子
私は豆を蒔く子は灰をかける曇り日　吉野紀之
庭もみぢした楓あり山茶花の白い花あり　和泉鷺人
水仙がにほふ食卓家族そろつて夕食　藤井克巳
朝の月明りなる冬木梅の木　金子北甫
火消壺に火を入れ冬夜母人　牧白蛾
いけす冬日をうけ生簀魚がうごくか　佐藤とく
野宮の椎の杜冬の日浴く照りし　高藤芹村
山神祭のあたり曖冬の皺透けて　櫂田逸仁
裸木の桐の木にやはらかい冬雲は寄する　姫田輝房
電光ニュース見入る鐵兜の人等が夕明り　美原素子
朝に冬菜畑の妻に聲かける鐵兜を持ちて
鳥鳴くありて枝に霜あり　不破默平
もの讀む人に窓暮れるいろ冬の日　有米飛路
切窓山肌に冬景色うつりかはり　伊東秋轟
星々僕の肩章の如く寒空にかゝつて　渡部杏甫
雲のながれ壕に背に落ちくるさくらわくらば　田邊芳香樓
農人堆肥作るなか〳〵夏草のにほひ　中村昌作
秋陽背に兵ら待避壕に入る待避訓練　島田啓生

征き征く道々雀とび立ち葉は枯葉　大野銀兵
朝散つたいてふの葉をふみ立ちて子等　高澤妙鬼子
大根葉しげり家に祖父あり　吉野紀之
この道をいそぎ歩く田は冬のすがた　和泉鷺人
牛が鳴く小春日を働く人ら　藤井克巳
地の凍りて機關車油を垂らし　金子北甫
一隊解散家々に雪深い　牧白蛾
朝禮のベルが鳴り磧のあさぎりのふかく　佐藤とく
朝の川面鳰なきあひてうすれゆく霧　高藤芹村
遠くの山に雪くる尾花がびつしりの河原　櫂田逸仁
祈念す雪の家ひくゝゐて國つ神々　姫田輝房
牛車ゆく森が遠く見えて夕燒　美原素子
舟つきたる月夜の濱の砂しめり
銃聲きこゆ草のしげりあかるく
溜り水にもの洗ふ秋日まだ落ちず兵等
魚燒く匂ひす雪ふかふかと故郷
兵しづらひし竈煙り大いに煙り木の多
菊の鉢ありてもんぺの叔母話す菊の事のみ
征く人と別るゝに家裏冬木のまばら
藁ひの今果てし人散りゆく刈田
河原の道にて焚火の二三人や聲高し
網繕ふ漁師等をり小春日の波光り
亡父の三回忌の水仙の花と亡父の句帖
月夜の家うち藁仕事に揃ひて家族
水鳥をりて宮居尊く御境内
からから肩で鳴る落葉肩をゆする
月夜障子にうつりたる小鳥籠

近作抄

○井泉水選

ひる月田舟押しやり刈りすすめゆくにて（伊勢路）　鈴木靖郎

朝のあめふる松をよぎるからす二羽でゆく

神山の一つらはもみぢする山の雨止むらしく

しぐれてはれて山が並んでゐる柿の木の柿

義手の手が無表情な秋草は手にもつ　小川都影

比良には雪の、ここいら藪ばかり藪に日がさしてゐる

すこし空いてきて車内の輿様編物など窓から柿の木

明月橋を渡ると流れの暮るるに早い山茶花やら梅もどきやら（龍洞二句

木には鳥がゐて芝生には私達がゐて先生を圍み

ここは梅がよくつて花にはまだ早い梅の枝が宵月（香風園）

夕陽のかげはむべの實、伸びてきてうれてゐる　青木青華

庭から訪ねて赤い南天の實の縁に座蒲團（前後庵）

百舌鳥のよく來て鳴く榎の木けさ飛行雲二筋

星一つかがやき出づる翡翠の色の空が多

わくら葉の散る葉となつてさくら落葉のぬれてゐる朝（追悼）

沙女鉛筆細くけづり秋は咲く花咲く　淨心寺惇

歸還してまたすぐお召しで草家葉雞頭

品川は鴉の居る森を西に埋立地の工場多

自分ではなかめる子で夜は父のそば母が居ない

船の汽笛が犬は霧にぬれて戻る

山の中鋸の音毎日うす日がさして　小田島義

山も川も月になつて小屋が一流の續けるを

落ちては寄り合うてゐる木の實の遠山はもう雪

茄子殿ぼきぼき焚きつけ雪のある山ない山

一村苗字が同じのいい水の井戸で柚の木

月が柿の木納屋の兎白くねてゐる　東松八洲雄

はるかに雪の富士、橋のてすりも召されて水に秋ふかくなる

飛行雲さはやかにコスモスこども繩とび

湖にも青空の雪の富士すすきの穗

杉の子の唄こども元氣な聲で山に日のあるうちに歸る

まさに寒月に立哨する敵機房總に在る　上野忠三

群れてまた廻つて來る鳩のピルデイング正午からくもり

戰意みちみち霜柱ふんで出て日の出るまへ

月だけの空の月よう澄んでたうきび畑

丘のたうきび畑刈り取つてもう犬が來てゐる、夕やけ

浪音、月夜のカーテンの縞が青いやうなをんなとゐる　瀧山重三

獨歩患者はひとりあるく看護婦さん秋の花持つて歩く

けふは大島が見える海から舟上げてゐる秋のてふてふ

枝に熟らしたままの澁柿院長さんは伸で來る

柿に一つ殘つた柿と雲の靜かに旗立ててゐるけふ

野に灯がともれてからの暮れそめてゐる　高崎貞之

灯をいれたのが驛すつかり枯れてゐる

あらしが朝になつてゐる陸橋

なほる時のかゆいきづもつてゐる春の夜

おしろい花と待宵草とよあけの汽車がついとる

征くを送り征くを送りことし櫻返り咲きしてある　片岡樹裏人

旗日掃き清めてあると庭、小豆は箕にある

すつきり晴れていま紅葉のちりてゐるなり

洗うて白うよろしき大根よめさん　櫻田輝郎

多日すこしてりてなほ薤にしてあるのが黍

柿はない枯れて夕陽のからすうりである　小林不惜

時雨空に敵機のかげ父の遺骸はまだ送らずにゐる

土間に收穫れて煤はいてゐるはれてゐる

雜木紅葉の富士が見えるに畫かせて先生も畫いてゐる

ほきほき枯木折る音多空晴れてゐる　木庭皓龍子

雲が少し翳りて月夜のボスト警報解除

華奢なゆびと、たどんが丸く灰になつとる

送つてゆけば星の降るやうな葉のちるやうな

裁判所の菊の御紋に椚が枯れてゐる木の空

たばこ屋にたばこのある朝の傘はいらない雨でゆく

流に咲くものも秋として朝日、馬小舍の横　津田笹彦

海に近い川の流れがゆるやかな多でないやうな船が通る

新しい戰闘機の編隊であることは子供が知つてゐて多晴れ

山に雪がきてゐると明日あたり村に雪がきさうな麥の芽

水車が廻る横の田から麥まく畠にしてゐる正月がくる

あらしの跡の無慘な庭木に鋸を引くのである　金平二火

朝日露けく茶の花、山に拓いた畠見にゆく

視できてから仰ぐまこと大きい選鑛場、に秋の日全し

濁つて川波薄陽してきらめくところ多となる

あつちでもこつちでもはたけしてゐる夕陽が山の冬雲

空も湖もくもる日の芒を採集してゐる子供達　井上有紀男

茶の木に茶の花のさく庵主さん町にでてゆく石だん

櫨もみぢ、山から子供のこゑの聞けてゐる

と、池に波紋が刈つた松がくつきりした月になつてゐる

あめがあがると濡れてゐる梨棚の斜面が多

ひとりぼつちに遠いながめがある　櫻田輝郎

石の大きさ秋の火を焚く

ちるのでやまへみちがある

木と家と星がまいばん多になる

コスモス墓參は制服です

秋日がとうめいなガラス玉であそびます　森久樹男

きのふは警報がでてけふは白い秋の雲少女とみかんをむく

二階家をかいて子供をかいて吊し柿をかいて、秋の繪になる

甕作る家の赤いはぜの木、村の馬鹿があそんでゐる

旗日の旗の家の遠くにはゆかない路地のさきの海が多

海から日のいでて船つくる人朝々霜　本多閒嶺

浪に多の日照る舟の中まるい窓がある

多木に浪寄るほし網日あたり

すずめ舟にとまつてゐて好い風きの多至

霜白き溫室の花である汽車が通る

あらしあけるとそのやうにそらが日向の犬　里井正子

あしたあけて夕べしめるだけの木戸日のみちてゐるかげしめる

灯がひるは茶の花のさいてゐたここの垣からもれてゐて通る

かなしい程夜ぞらのくもが白いひめごとをもつ

たんぽグングンと刈りゆく雲が雲と移りゆく

へちまがさがつてゐる和尚さんゲエトルでお出かけ　三浦香女

時雨れはれると鳥がふうはり來てとまる稻架がある

山茶花やざんざん降りになつて降る　村田白鵜

鳴いてゐるのはひよの鳥櫻もみぢ洗濯ごしごし

秋になる風が空にポプラ

情報を聞いて茶の花、今日も敵機の來て去る一機で

霧に旗を出す朝を早く船で征かれる

草が、屋根も枯れてゐる

柿の落葉が月の出で馬が厩へかへる車で

樹の間の海がもう薬も散つてしまつた白波

えんとつのかさにゆきつもつたまんま星になつとる空

雪の夜のシグナルばつちり目をあいてゐる

朝の體操の呼吸運動裸の柿の木裸の栗の木

いきどほり暗い夜へ惡魔の放つた火の美しくあがるも（帝都空襲）

子供の手に手をそへきれいになるまであらつてやる

渦つくるダムの月夜と落葉する

道しるべが火見櫓の下書ちかくて霜どけ

乘るとバスの中灯がともり山が暮れてくる

警報解除青いみかんと防空頭巾と日南

寮へ道が茶の花垣陽がもれて來る

工場の大きな窓に冬の雨にぬれた海が明けてくる

ふる里は人力車に乘つて銃後の刈入れのすんだ道

青空いよいよ青く茶の花しべ出してゐる

障子いつぱい冬日にして棒の果まだ青い

播いたもの少し芽を出しあたり工場の音にしてゐる

山茶花散る散る上北の空を飛ぶ子が

既に爆音なし落葉の日向へ椅子を据ゑる（十一月二十日）

夕月が飛行機雲のそば空襲解除

冬風の渚による波も警報解除ごろ

代々木の杜が黄ばみくるその空の富士の形を

女學校からたちの垣さくら枯枝の雲白く

風花する日のみそつちよの靈西日となる

サフラン咲き出でて赤い蕊冬日あまねし

女學生白い襟向き向きに晝餉麥踏日和

岡田　琅玕

咲いたまま枯れて居る日に向いて居る

風のおちた山の容の水の音だんだん月夜となる

藥箱からくすりを指のくろいくすりを

昏れるまで稻架に日がさし月夜の稻架となる

稻架も田も黄金の稻の明治節車中遙拜

山に山のかげ橋にわたしの影山を下りて戻る

ドア押してはいるお役所がしぐれてる日曜執務

畑のものは大方ぬかれて菊が少しある朝霜

庭木ひと通りは剪ひ終つた日のさして時雨雲

町へこの橋一本の暮早く野菜を提げて

朝靄が海邊らしくてつるべ小屋の霜

散りつくして月の木がある空

小原　甲陵

白石　默忍禱

阿蘇が雨はれた朝空からもぐ

霜、疎開學童食前の禱りささげてゐる隣の障子陽のさし

阿蘇も此邊裏からすぐ外輪山へひとがないてゐる

いただいて今日は冬至の南瓜のまろさ抱いてかへる

庵寺黄菊白菊裏は竹藪雀がゐる

島山として灣の中の山、日南だまつて麥蒔く

石の道しるべここに日のさし雪ちらつくをゆく

田圃牛が耕してゐるここら松下村塾近しといふ

てんでに柴を負ふて山いつぱいの多日ほすすき

秋の日白い雲通る窓にしてトレースしてゐる

石原　元寛

佐藤　逸仙子

此頃少しのびた日が土塀の長い警備であり（中支にて）

秋深い甍壕も此頃敵も靜かな草の穗暫く雨がない

青い旗赤い旗振つて貨車を靜かに入れてある夏山夕日

雪に備へて白い大根の干してある朝早く勤めに出る

白い鷄と白い山羊と山羊は日南の杭にゐる

澤木　正

鯛崎　寸南夫

我妻　魔神朗

疊のうへの陽が家の中を明るくしてゐる佛壇の菊
疎開の兒らがきてゐる小さい醫院の山茶花
種のうへ黒土かぶせてゆく夕日後から踏んでゆく
星がいつぱい枯枝についてゐる警報發令中

名雪理輝

本の實落つる音のかはやにはゐる
刈田昏れる空が昏れないでゐる
藪の木のもみぢ學童防空頭巾かむつて通る
大工さん年とつてお茶の時間お茶のんで木の柿
開墾畑朝早く煙りあげて麥蒔いてゐる
多日松林松葉杖ついてくるのが子供

故濱田煌一

正月晴れた空で葉書が一枚
一人が出てくると青葉の郵便局の前のポスト
村の小學校の柿の木日かげり鐘が鳴る
戰ひまだまだ續く三場が汽笛ならすと遠い海の波
松林の雪とける下の雪一人通つた道ゆく

日向野秀策

多の雨しづくする藁すぐる藁にしづくする
雪の川が町に入る警報出てゐる日のくれ
家の内も暗くしてラジオの位置東部軍情報
貨車に積みこむちよつと休みの日なたたらつく雪
けふもよい月になる川音きいてゐる

大山多石

ふと犬のなきごゑが東京のことなどを月のいいばん
町が山が二階から見えて松の木のあめ
蝶々よふるだけふつて晴れてゐる干しもの
多になる林の向ふ二三軒の灯と星空

内久根聖巳

やがて晴れよう雨が菊も終りのあめ
稻田稻田とつづく遠足の歌が豫科練の歌
うちの畑につづきお隣の畑月夜明るい
明日は征く身の、冬木の枝白足袋干してある
富士ことにけふ白し學徒は工員ともに休憩時間
敵機だ伏してしみじみ匂つてくるものが大地の冬

淺井冠二

きりが匂ふ曉天の木々の銃はつめたく
多のかぜの月が出て夜になる
冬木に月が出たせまい海峽ではある
川原の石が暮れてしまつたからす
その尾ながながと谷よぎるきさす朝はれ

佐藤專子

寢るまへにも多夜の半枚の新聞の裏表
鴉ないて冬の陽一ぱいに椿の葉のつや
こけむすいはほのみふゆのみづおと
水仙が開かうとするみちの峠の空
鐵を斷ち切つてゐる野菊が生けてある

高橋一渕

古瓦よせて置いて水仙のつぼみ
田にしあさつてゐる夕燒け
石の割れ目に雀遊んでゐる
掃いたあとの雀遊んでゐる
あをい空と畑の青いものすこし寒くなる

木村幸雄

秋ぞら風のふく木の枝に葉がついてゐる
波がひとつの線となりよせてゐる灣のなかの部落が秋
時雨すぎし梅の木のくらい反り枝と水脊する
敵機は來ずに解除になるサイレン山茶花のはなこぼれ
うぐひす、その横顏から山の朝である

渡邊剛彩

夕べ道ばた山茶花のほの白く戰果發表
とびのしづかに鳴きめぐるところどころよみもしてゐる
四十雀とびうつりまだ切れてゐる枝の花山茶花
鷄小舍へにはとりかへつてゆくころの家が二三軒灯り

多菜洗つてゐる少女に犬もゐる川の橋を渡る　武田　桂

赤い着物の女の子が繩飛びして冬木昏れてゆく

昏れるに茶の花白い道を昏れないうち

あしのなか遠い灯が秋が灯つてゐる

空があたたかいので水車が廻つてゐる

ふりつくしてしまつた雪の白し　芦立陶抄子

月夜がまいばん芽吹いてゐます

白く咲いてゐて梅、そのひとの妹さんにあつてゐる

椿のやうに咲いてゐたいと思つてゐる

雪になりだした藁家のけむだし

海から月夜が溫泉の町あかるい三階四階　高橋政二

溪流が村になる道の雞（英彦山）

冬日樹深くくだかけ眞白なる尾羽を長く垂れ（外宮）

まめで歸つてきて風かたこと相も變らず、寢るとす

入江ぬつくい藪の前藪の柿

夕日にお山の雪がそまり煮物が煮える　平岡國次郎

時世に反いて茶の木の茶の花美しう咲いてゐる

越すといふてもつひそこへ百舌鳥の鳴く日に越してゆく

二枚の葉に一枚の葉の生れてゐるのを間引く

ねぎも百合菜もやはらかにして霜の下りるころの霜

葱は根の白く一ぽん一ぽん植ゑていく朝の日

まだ小さい麥の芽も影をもつてきた霜どけ

雀は羽の蟲除つてゐる漂ふ白い雲が冬

蓖麻の廣葉がしづくする晝のあかるい雨で

空の青さも冬になる岡の椋の木　落窪京太郎

鎌倉の先生からの手紙を机にさしよる日がもう冬

枝のかげのドツプリ繪のやうな、など試驗がんとく

マスクのゴムのゆるんできたのも風が春になつてゐる

へちまに秋の空、しづかなる女の客とゐる

鶏がむぐるとあちらにも鶏の、盧に波　南川鴻兒

夕日なほ庭木の雀もう歸る、お針子達で

裏町は薄日さしてゐる鹿箱で海見えてゐる

硝子戸越にけふは小鳥がたくさん來るお針子たち

蓮の花のあめ雨は海からはれてくる

裏はすぐに田の早田をまへに質屋の黒いのれん

月が雲を出た森のなかのあかるさあるく　角田重信

木の枯れた月あかりとなつて少女突撃隊がゆく

かかり舟と橋と柳と冬にならうとしてゐる

月夜へ落葉おちてゐる茶店の前冬

この捷報正座してきく父であり子であり冬　皆川蓼二

幼くて防空頭巾であそんでゐるおちばおちば

寒い空ちごのそらへさをになつて消えていく

海のいろのぬくしともみかんはあましとも

豆を打つ一日暮れて星が出てゐる　太平成正

落葉あさ家の横道があつて人が通る

雨晴れてそばの花兵隊さん通る

海かぎりなく雪降る

話がいつもおなじ話看護婦さん白壁白バラ　井形春一

杉の木は星が出るころの檢溫時間

看護婦さん月を見てゐるかげがベッドまで枯木のかげ

戰場からもハガキ一枚來て今年もおしせまつた空

はだか體操の朝は山の雲百舌が鳴いとる　瀬川水音樓

警報すぐ解けた空ざくろ大きく割れてゐる

霜草ほうきにして涼しい朝掃く

夕月が明るんで來た鎌の刃　法雲寺三郎

故里へ電車は走る刈田に刈田軌道直線

立哨中異狀なしと報告、それからの寒い闇で

たかくたかく抱きあげて子にいてふ落葉する

痛いほどな星の光です歩哨交代の敬禮です

生へてのびて麥の芽からすが木に暮れてゆく　高木三蕗

山がもみぢして麥の芽からすが木に暮れてゆく

茶の實も供出してわらいへ冬のかこひを

決戰薪の奉仕日で落葉に霜　武鑓青杏子

月が出ると月の夜これが最後といふ君の手をにぎり

雨の日でも敵は來る雨にぬれてをる旗少し風のある

花も葉も喰べられる花が秋を咲いてをる

初めは女でもよいと言ふ話の厨大根の白く洗へし　村瀬汀火骨

潮川月夜の潮の滿ちてゐる年の終り

よく晴れよく稔りあなたの墓のまはりの草（朱鱗洞墓）

壺に椿いちりん白衣綳帶こうかん　〃

夕日に染る浮雲の一機全速、秋　長山林二郎

仕事しまうた空へ暮殘つてゐるみかんの木のみかん

作業服に句帳も鉛筆も明日もまたくる冬の入り日

あるともない風が竹林をこえてくる秋のてふてふ

軍港をいだいて山の、向ふの山もくれてくる冬　前田若水

あさのとりの枝にゐるせつちんにゐる

むかしからの栗の花召されてたつ

ぎすを鳴かせて秋口のたうげをこした病人　關口江畔

學徒作業あと栗を拾うて來て今晩くりめし

茨の實あかく西陽の地藏樣が信濃追分

その頃母はこのみちを落葉してゐる　〃

藁鳥にしてから月の道に牛が待つてゐる　法雲寺三郎

脫穀機の音の一日穩かな淺間の煙

あかとき星が一つある屋根の線初冬　細谷野蕗

霜おいた田みち遠き山、山の線

遠き山の雪近き山日當りて木の柿　川廷謹造

田へ唐箕を据ゑ晝のけむりたちのぼり

うつくし秋空一年振りのやまとをみな來る

見わたすかぎり麥畑の樹のある所は部落らしく兵隊さん　田島素琴

兵のたより檢閱する妻子への、などもしみじみと秋

麥だけまいといて征きますといふ、霜

雜炊あつい今日雨の麥蒔き休んでゐる

どうだんもみぢするとちると笹鳴くころの朝となる　金山光曉

葉がちつてゐる驛前通り女にみちきく

雪の白い朝の局の入口はおしてはいる

鮮人白い衿あはせふちちらするのが初雪　夏堀望子

警報けふはなくて夕陽じづかにさざんくわ

枯草も日向は蟲鳴いて線路下の道を行く　阪部蝶三

銀杏ちる街を歩いて昨日空襲の東京

峯は先づ日を感じけふ稻を刈る

日に日に紅葉まいにち爆音山は晴れ

十羽のうち二羽だけ育つた雛である餌を爭つてる　高橋松二

さえた三日月が多木にあつて町の灯ともり

配給でたりてゐる灰皿のすひがら、多　齋藤青圃

棺を打つ石を春の星から探した

まこと麥の青さが多空

多木多木暖かな分教場歌ふてゐる　小川于佳

ふじはにつぽんいちのやまと兒が讀んでゐる梅の咲く

○ 卍禪子選

雪あしたおごそ襟冷ゆ大詔奉讀の　大橋鏡作
幾日越路の雲ふる日をきほひゆく
警報發令外面夜半なり寒むみ雪あかり
畑に雪ふる葉々に音して夜ル　奥村そのえ
水けき雪の折れしかあたら常盤樹　山口江浦草
雨の眺めは白ぼけて馬のくらをやうやくしてゐた
村落はまだ遠く山茶花どんよりとした季節　森谷乙山
藻にゆれて秋の小魚もつと大きなものをつかんでゐる
森の雨を親烏鳴く多への寂なひかり
低空飛行の多のお別れ母ゐませりの氣持を望見する
この秋ゆ風邪藥ばかり飲む汝レをたしなむ　河合英觀
冷ゆる日が暮れ診てもらつとる親と子
夜長癌いとし子の十月名殘りをセルのまゝ
南無本師の觀世音像にうめもどき挿しぬ　渡邊如關
臥てゐる程の病でもなく消え殘る星へ出てゆく
月の夜更をかへるお巡りさん御苦勞さんと云ふ
言ひたさ云ふてしまひ晴々落葉する樺　照井稗人
ほつと出る壕外まぶしく秋空いつぱいに息
燒夷彈すばやに打消す星が寒々と
大木も伐つてひろうなつた權現さんの秋の雨
降りやめば笹に流れあるかな
冬の、枯葉の水輪があり家のうしろ
赤土の庭の赤い芽赤土山つづき
山田灣山田屋に泊るとする雪明り
ありあふもの防壘にして病みますよ霜夜　久野仙雨
未明の空襲遠い昔のやうに雪がつもり
防空服裝の手の南天に新春があふれ
薄氷日に解けるそんな人生を生きぬく
刻音にいつ寢た寢ずの身の讀みかけてあり　山口江浦草
呼び鼈つぐモンペのモヤ灯に消えつ
待ちある構へ朝疾く着ながしに言ひ寄る
メガホンはりを人とてなき灯の溝板凍てし
暗み伏せつしめり香に擬音彈近かき
學徒らすくやかに寢たる山門も消燈す　園木六食子
乾葦ほきほき野生李廠の仕上る
男の子征たす弦月の辻萬歲を和す（次男入隊）
羊追ふごともどかしく精悍の氣を欲す
テントのなか薄い莫蓙置いてある何もない
雲へ雲へ翼翔ける神胸刺すを（レイテ二）　衣浦眞
ものかはあらし瞳必殺の想ゆるを
きりりと締めよレイテに續かむ怒髮わ禮らも（神風手拭を持ち）
襟巻首の壓耳に掌し戰果？と い寄る
さりげな駈足煙草踏みゆきし必死行とぞ
涸水期發電所の水管模樣ついた楓葉　南畝三坡
寒ムなり口着膨れ牛の角の甲馳
日もち千輪菊千ケ寺詣千人坂武運長久
ちらちら粉雪ちらつく野菜籠の芽いも
富士を見る窓庭に風あり縁に鐵兜あり
工場地帶遠ホけぶり掛稻は夕づく陽
湖畔月寒ム大樹影あり佗住むほとり

木々木枯れ野の一つ家の朝子は犬と　小野暮仙

灯冷エつらつら半袖かさね寝もやらず（閨怨四）

面細りたる時雨しぶくに立ちつくし

雨の手並べ指細りぬと打返し見せ

髪梳くすがた何がしら冷ゆ唾を呑む

霜けさに傷ミせる大根供出近かき　濱名白香

紫蘇糖のことなど常會は餘談の餘談に散じ

赫々の戰果蔭のかげの母者尊とし

農業要員よろしわれらみ民わが部落

畦ぢしろき鳥形鎌のありし昔も　今井默天

山づみの三河路とあかね文北の方

その大ぞれの谿深きもみぢぐれなゐ

亜細亜は興る決戰の飯うまくたべる

松葉降つてくる笹やぶの龍膽　萩原アツ

祭が過ぎて川面の月が學童のうた

一つびとつ星の世界だ多の人生觀

きれいに散つた落葉ふんで陣地へゆく朝の大氣　渡邊舒生

朝に落葉ふんでたゝかひの生活になれ

起床ラッパ響く松林にもう霜ばしら

たより無し幾月大桐の病葉が落つるにも

庭畑をつくり孫と配給の芋粥を晝餉

終電車ひゞく夜半の肌冷エ秋去りぬ

落葉數をかさねしけさの水甕に蓋を置く

雪の遠山の空車犬に曳かせて通る

庭の物干に小鳥が來てゐる日がさしてをる

人かげあゆみ去る地の冷え　英吉更

手にしてはうちわ見舞ひにきてゐる

○一碧樓選

多木ありにちにち働きぬく汚れた靴をぬぐ　吉川金次

朝その一つ一つ銀杏を焼いてたべる

工場を出る多菜畑青い夕ぐれ

桐の葉が梢に殘つてゐる子どもと遊ぶ疊に

多木のなかを吾子を抱く重くてあるく（吾子病む）

かくてゆく爆裝機を思ふ木々の冬の日　林鷲水城

かりんの包ひ棚の一つのかりん窓がありかりんを漬けるとてすわりこの人

をんな子をなして多が來る山容あり

あさにコスモスが咲いためしを焚くにすわる

待機のまゝ短時間眠りあさ厨に柚子がにほふ　星野武夫

冷えて竹五六本立つそこに消炭

老父が家にて生死を共にする山茶花が咲く

脚絆を巻き直し夜の明ける地の初雪

林檎一つ風呂敷に包み多の夜家にもどり

赤く蕃椒それが誰にも見えて沙畑　相澤華芳

多の日ゆく方に見えてゐる原のまんなか

港内雪ふりこむるに石積める船そのほか

暮らし堪へる雪の日葱畑は見えない

雷魚揚げる舟板にて首太き人々　守矢自由也

わが口籠る一句柿の冷たいをくふ

地を多空を進軍ぐんぐんいつてしまつた男

妻子勝つことを識つてゐる多菜畑あをく

戰時家あり多の麥色あり　　山田不雪郎

わが艦隊司令官がどつしりをる冬日潮のうへに

納屋新藁のかさみ曇り　　木内柳陀

そら持ちこたへたり稻上げ

大根仕事いちにちありがたい空

青い草霜を被り木の根に

濱人濱に出づる雷魚暴れがくる　　富岡鍼

芦荻に舟うかべ源とほし雨のいろ

石きる山にはぜ赤し增產さらに

船をあがるよろこび町の濃霧のなかを

薄彫りといふ石佛はもみぢのなかに

石佛はつゆじめりすかなたに航空隊

土塀あり士の家々あり高粱青いに　　大竹北汀

部隊の靴音遠くなつてしまつた秋夜深い

多とおもふ日ざし地に軍帽のわが影

鴨來よ葦は青くて一方になびき

葦にまだ青さある鴨は浮くばかり水の上

山雲其處の山々段々向ふへ高く雪あり　　堀川屈人

海と空とひがしに續くが如く大根畑

雲朝やけ秋海遠くへひろし

野は遠く露草のなかへ鍬を入る〳〵

手をおくに熟柿わづかに澁がある思ひ　　後藤零丁子

庭木をきり草莽われら堪ふる冬天あり

みたみ男工女工たち待避するところ冬の日

父と子と頭寒くゆく畑の麥芽ぐみ

われ防空の身近く小鳥鳴き冬の日

貨車きりはなす冬天の下驛手青い旗ふり

われにこの夜藝能大會綿入を着る　　山田不雪郎

漬菜抱へてきてこゝに牛の大きい貝

空うつる水ありうす氷あり姑慈を掘る

かくありかくくらす寒菊おとろへず

敵に對ふ多山の彼方雲あり

藪にちらついた曼珠沙華をふりむき　　長谷川杉郎

水葱の花をよろこんで見る雲のしろし

山は山のかたちにくらくなる刈田の水

敵機來るなら來いつぱぶきが葉と蕾

夕照雲から射す山穗芒のみち　　米田稻介

障子をいれて日々を住む大陸の空澄めり

枇杷の花さく朝曲轉機くるくる學童たち

畑の青菜が育つ學童たち朝々畑まはりする

壕を掘りふかく掘り冬の日まうへから射す

居留民を愛し學童を愛し冬晴れしわれら働く

家に鑒ある父母にして馬の顏に降る雪　　川島南海城

船頭に明ける山あり寒天舳の汐筋

山有難くて淺い瀬があり枯茄子が畑中

家に父母あり寒天草枯れた鷄の歩み

戰闘わが心枯葉を干す砂を踏みて　　伊藤碧洋

傳令雪をこぎゆく供米廳の學徒の一隊

襟巻のよごれたるにも跫跡の種をむくお婆さん

枯れ〳〵の墓をひくからす瓜日てりて子供

みちのべうるしの木うるしの實房々と吹く風

峰の一線山毛欅やら疎ら立つ樹雪一色に日てり

椎の實拾ふ木の間うすくしろきところ　　林さあを

さゝ栗拾ふ笹のなか岩肌

ふるさとなれさゝ栗笹に落つる音する

鵯遠くに鳴く妻濡れ鎌をさげて立ち

遠きひとよ掛稻月に寄ければ

秋の日穴子繩をしらべてをる沖の潮騒

山本光王

亥の子風吹くずつと山べの大根畑

ずつと芽麥畑すれずれ練習機離陸

吉岡南呂

をりをり雪ばながちり山へ行つた老父

神風特攻隊あり國土ばべの秋芽

吉岡南呂

けふ親馬から乳離して薄陽する厩に

食用菊を盛り上げし笊のまろさ安定

稻架小屋のそこから虹し一天

炭木を伐り倒しその黄葉が散りて

梶山羊介

虹がにほが國の旗日にして

圓形廣場のサルビヤぬかれ鳳仙花赤きのみ皆搗ふ

鳳仙花搗へば車を呼びすなはち乘りて

安南が夜が晴れ青澄みて窒にひとつの水差

黒丸古生

風吹くジヤンクと海きれいこれはお話やめない夫人

夏來るそれら順調ひといそぎゆく見えて

山茶花はつきり庭から見える隣人くる

刈り入れ人の車を押して行くこどもら

金子・曙山

車中見る山々のかげくらし一本そこに紅葉

君をおくる人々と行く氷をふみ

冬日霽れる雲のいろ子を連れて雲を見る

しぐるゝこれは山の水の骨柴の木たばね

山が明るいもう冬となりの木瓜つぼみ

冬こもるくらし朝の竹藪かなたの空

裏木瓜が咲きかけし壺の藍が滴

藤の實くろし家を出でては子遠

栗林もう實がない一筋ながれ去る水

新田實三

霜月篠懸の幹々明るく君が征く

疎開兒と家人とそこにも櫻もみぢ

枯草丹念に刈る子供と土のぬくもりに

好日白い玉砂利にこぼれ松葉をひろふ

藤森澤鶏

莖菜漬けてそくばくのこつてゐ笊の鹽

艦隊うごく潮のうごく霜夜があける

近く雪の山あり工員の宣誓する聲

凍るみづうみちかく住みてそかいの子ども

一帶草枯れてゐかぶら汁を吸ふ

佐藤豁山人

胡桃落ち盡したりと思ふ雨上りくるみ落ちく

雨となる嚴しき階段の石濡れ蒲公英青く

柿の葉の紅葉美しく自然薯を掘る

口田朴也

木瓜の實黄に木瓜の實たゞに太く

芋の子に親し木の葉落ち、そむる

炒豆噛みわるこの焚火この風

晩秋の溫とさ立ち足裏の泥

大き牛に多あり朝の諸蔓

田邊愛水

甘蔗畑から子供が默つて出て歩いて居る

多木曳く供出も水に寫つて橋の人々

決戰けふ子らがとつて來しすき一束

敵機更に來るを覺悟多菜を漬ける

ぢつと池のおもてを見る枯葉池の水

決戰けふ稻藁をたばねる日くれる

われらが食糧增産隊一隊霜朝ひろいみち

大澤蓬舍

霜に草あり海の方へゆくに道あり

供糧秣委員おそい月の出も見える
櫛櫛が花だして虚空日のひかり
秋は朝々事務室のうち木の影あり
少女二人で來るうしろ草のみち秋の空

齋藤多三

人々あるく街中の廂のゆきが落ちさう
ゆきふる無限觀世音慈悲無限
廬の世界夜であり女人でありし
さやう汪氏につゞく者共で大陸の冬

佐藤未黄

雪しろし家の戸口こどもうごいて
馬鈴薯土のかわかぬを三つ四つ風呂敷にいれる
ほのか枯草のにほひ大空ゆく雲のかたち
机上埴輪いろ古り遲咲きの菊黄色

永井はるを

坐して師の面仰ぎみる心持冬の日われら
集ひて師を語るわれら卓にあり大き蜜柑
石運ぶことくり返すはれてある冬空
山の多木の枝がゆれてある雲のうごきがおそく

御所窪けさじ

一團の決意霜朝の坂道のぼり
屋上を吹く風星夜のわが任務
一人はストーブに薪をくべてほのかな明りある部屋
蜜柑をたべ山を下るに海遠くないみち
潮満ちて興居島戰闘機とぶ興居島枇杷の花さく

今井四露史

港の人々夜になってしまった戸口多の風吹く
人々の生活蜜柑木にうれし山の中にある
多の日肉牛角をもち乳牛角をもちある
稻刈り先づ畦豆から抜く長い畦

瀬尾一風子

田に田螺がすこし干てある稻を刈る
山田の稻を刈る素直に出來たきれいな稻
夜稻を架けてをる穗の重みがある音
一機飛ぶその方に在る花百日草の花

齋藤多三

比島に決戰をする多の帝都の建物
こゝに多の水たまり殘り必勝淺草觀音
水たまりに多のものうつりお堂うつるを行く
川筋月の多木立あり舟をつなぐ

宮坂啓風

敵機を恐れず我らが空の星光る
多木影ありて母と家に入る
敵機殘骸ある枯草の中青い草あり
我が指先つめたし巖のべの黄葉

牧野秋風嶺

鰯いつぴき釣りあげたゞよふわが小舟
酒のみに行く漁夫らとゞろ多浪
泰山木の實われてあり空ゆく小禽
稻は黄熟道べの田の面草の花さき

菅木葉

草の穗うごく道端に引かれ枝豆一束ね
牛蒡はまだ掘らず白菊の花咲き並び
山べに家があり無花果わづか木に殘り
子供同じ方向に眠つた草ひばり鳴く

中根尉策

裸身神兵敵を擊つこゝ穗芒が立つ
空襲下事務室の一角の野菊の花
竈にゐ敵機動くを感じ多夜の星
秋の夜作業服と電氣ごてと

泉大眸

かけ稻雨にぬれし今日は池に鴨下りず
山鳩のはじたき豆畑の豆の葉は枯れ
一社一句の願はじめ神杉の多肌
小石二つ三つ拾つて戻る神無月の渚

近藤紫村

軍屬吾等多或日濱からすと船と

南の戰果とは別にうろこ雲陽に照り

君物言ふ如し旦多樹直ぐなり（悼句）　島津四千起

海面くらく川口につゞき草地の芒　辻午子

川邊はなれず歩む路なり烏瓜赤い

燈管白い列いく夜かの机の書類

朝に聞く盡忠神風隊霜とけて樋に雫する音

人が苦をあんでゐる秋海の荒れてゐる　相場汀石

好日曼陀羅降る日一日の萬年青の

嚴と葛の紅葉するとわれらの月日

われらが家にきた朝のあかるみへ咲いたコスモス

河鹿々々鳴る音のみ夏或日ひとゝき　山村九十九

夏の山泰然霧はをり〳〵吹けり

もえるごときもみぢの杜のなかに入るためらはず

すゞめもみぢ一枚一枚咬へては落す小枝

掩蓋の骨組みを寒い日仕事つゞける　沼文生

穭田に敵彈落下す穴の溜り水あり

照空燈が敵機を捕捉する星冴える空

今夜敵機の來るを思ふ凍みち踏んでゆく

寒空に砲聲ひゞきこの組隣組安泰　遠矢潟丘

芍藥紅い小い新芽が見えるすこし冷える

蒐麻は樹とのびゐ鴨足草すこし地に生え

燃えず煙噴いてゐる島山の裾の朝霧　渡部湘雨

時雨來る坂を下る道端の黄菊ばかり

多夜一人は太き指を顔にひろげてねむり

溝に落つ水遠く近く聽きて雪夜

そこ竹あれば竹に吹雪くよるひる

襖少し暗けれ友に麥を煎む　神官に一枝のうめもどきがこの日

竈祭る人々の焚火にて私そのこゝろ

戰果に謝し灯せば匂ひ來る菊　島津四千起

秋日街樹の下に苦力儲備銀を摑みかぞへ

菊並べて壁白く天井高し

壯行會團旗に從つて我れ秋日或時

草に寢轉んで渡鳥がうれしい地の冷え　龍田眞魚

月齡を感じ多夜の遠くの軍歌

多溝はそのやう流れども遠くへゆかない

多木と野武士のやう我等が立ちし

土鍋がまるい父親が煮るものゝ一つ白菜

焚火するこどもと共に空を見るこゝろ霜朝

諏訪湖鴨が浮いてゐる殉ずる心新にす　山田蒲公英

增送增產會議へ霜柱見下ろしてゆく

必勝の氣魄山畑傾ける芽麥のあをく

國強し雪降れば雪に鍊ふるこども

吹雪く空星ありて見ゆる家の棟　淺野麗木

さぎり灯る窓みえて中にゐる人

水仙の鉢を置く疊に防空の裝具を搬へ

機械ひゞき始め多木その中の工場の棟

雀とび石ころはその場所にあり冬の日

落葉に足うづめてなどあるくこどもと

これの串柿核がありおほぜい子をもつて妻と

谷みづのながれ一日窓おほふ茂り合歡の木　谷しんいち

夏日身體桑畑にかくれ地をふむ

風の日人と枯草ふんでたつとほく印旛沼みゆる

兵士が一人軍裝草をとぶとんぼ

內在律俳句の倫理

寺澤良雄

うづたかく積つた苦惱を心に背負ひながら、「年暮れぬ笠きて草鞋はきながら」と芭蕉は旅のさなかにあつた。身を挂杖一鉢の輕きに纏ひ、句に心の苦惱をさらりと吐き棄てつゝ、きびしい彼の正風樹立の旅は續く。我等も亦、纖兜をき、しつかりと脚絆を締め、彼の歩んでいつた一筋の道をひたむきに追はなければならない。

私が內在律俳句に心をひかれるやうになつたのは、さまで古いことではない。五六年前のこと、ある文藝雜誌の一頁に一人の小說家が隨想を記し、その中で輕く內在律俳句に觸れてその文藝境を紹介してゐるのを見つけた時に始まる。「干潟にはさゝら波梅の村に入る」といふのがその時の句であつたが、實は私も亦この句の瀟洒な心に深く搏たれたのである。それは又內在律俳句が美の傳統の中に見事に開花し、芭蕉以來の俳諧の心をその新しい詩形のうちに豐かに息づかせてゐるのを知つた竊かな驚きでもあつた。

その後私は內在律俳句に數多の佳品を發見してきたのである。

春の日の禮讃にあるは鉦うち鈴を振り

種馬あらび躍りたち寂光土

風凪いでより落つる松の葉

まことに京のかりの宿りの白い團扇を置く

瓜畑へ朝の戸をあけて出てゐる

これらの句の中には、われ〳〵の古典がもつ特異な感情の美しさが、水々しく甦つてゐるのである。內在律における正風開眼ともいふべきであらうか。日本美の永遠と、ふくよかなこの青春とを心から祝福せずにはゐられない。

私がここにいふ美の傳統とは、蕉風確立このかた脈々と流れきて盡きぬ「俳味」の血統に外ならない。瀟洒な心閑寂な趣、而も時には飄逸な風貌をさへ帶びるこの「俳味」は、深く日本人の理想と現實とに滲透した感情でもあつた。

併しこの「俳味」といふ言葉は、最近はさして頻繁には用ゐられてゐない。卽ちこれは一見明治の中頃に現れ、大正の初め頃迄に專ら流行した時代的な美の徽標のやうにも見受けられ、現代においては殆んど顧みられてはゐないやうにも思はれるのである。

俳諧の本質は、その靜寂な觀照にあるのではなからうか。そこでは、和歌の詩び盡しても猶言ひ足りない情念の聲は響を潛め、感動は鈍い光澤を放つ形象の內に籠められてしまふのである。こゝに「わび」があり、「さび」があり、「俳味」があるものと思はれる。かやうな瀟洒、閑寂の趣味は明治末期に流行した「俳味」であると同時に、又時代を超えた俳諧美の一の特質といへなくもない。

これは日本的な觀照が化粧するつゝましい感情の一の重要な契機なのではあるまいか。「わび」も「さび」も「俳味」もかやうな瀟洒閑寂な心境をその母胎としてゐる處に、相互融通無碍なるものをもつてゐ

るのではなからうか。

「俳味」といふ言葉が、現代俳句において餘り顧みられなくなつた理由の一として、我々はこの言葉が月並俳句の隠使に委ねられた結果、ひどい月並臭を帶びるにいたつた事實を指摘することが出來ると思ふ。「俳味を知るにはまづ俳臭を知るべし」なる「蛇の言葉」には成程と肯けるものがないでもない。加ふるに西洋文藝論の澎湃たる侵潤により、俳論俳話に現れる樣式的徽標にも時代の流行が翳を落し、最近では象徴的とか印象的、抒情的、感情的といふふうな言葉が古い「さび」や「しをり」の語にとつて替り、同樣に「俳諧の氣味」とか「俳味」とかいふ美的徽標も何時の間にか「俳諧美」、「俳句美」等にその領域を讓つてしまつたやうな感じもする。而も見逃す譯にゆかないのはこれらの變遷につれて各徽標のもつ内容がそれぞれ轉化してきたことである。「さび」が「俳味」となつてより、俳句の感動は薄れ、「俳味」が「俳句美」と變つてからは更に已が日本的特質への認識と同情に缺けようとする危機に臨んだやうに見受けられる。

「俳味」といふ言葉は、俳諧の日本的な純粋な流れをいみじくも堰き止めた最後の言葉であつた。この純粋さの故に、私は今猶この言葉を愛してゐる。月並の臭氣は、これを洗ひ落せばよい。無感動はかの時代の青春の貧困の故である。私には、「俳味」といふ言葉を眞に體得してゐる人にのみ、豐かな句が産れてゐるやうに思はれてならないのである。我々の新しい感覺は、この燻んだ古さの中で磨かれるべきものなのである。

日本文藝の古い道統に限りない憧憬と愛着とをもつ私は、「俳味」といふかやうな古い言葉に觸れると、嘗てこの言葉に含まれてゐたつゝましやかな情調に不思議な程心をひかれ、これがその時代なりの生命感にふくらんで息をはづませてゐた頃に思ひを馳せ、遂にはこの言葉がすつきりと呼吸を整へて現代に現れる時、ひそかに俳句世界の扉を叩く反省の訪ひになり、やがてはこれが「さび」、「しをり」への通路にもなるのではないかと、心愉しく想像してもみるのである。

いづれにせよ、現在「俳味」にはしつかりとした意味内容が與へらるべきであるとはいへさうに思はれるのである。尠くともこれは、古典への再認識と俳句の新發足とを結びつける一の宿驛とはなるであらう。惟ふにそれは、たとへ西洋風な美的思潮の洗禮を受けようとも、已が生命の清新な息吹きに滿ち、牢固として生き抜いてゆく日本的特異性に深く根ざしてゐるものでなければならない。と同時に又、必ずしも定型や花鳥諷詠趣味などと結びつく必要はなく、時代を超え、流派を絶した純粋の美であればよいのである。そこには、象徴的なものも、印象的なものも、又、抒情味豐かな、若くは感覺の鋭敏纖細なものも、ことごとく一の位相として籠められてしまふものと思はれる。かやうな「俳味」の樹立にそれ〴〵の進路を向けることは、尠くとも現代の俳句界の、さま〴〵な面に迄滲み透つてゐる混沌をさつぱりと洗ひ落す一の契機とならない譯でもないのである。

「俳味」への反省——といふ問題は、新傾向運動の當初にも既にあつた筈なのである。新傾向俳句が俳句である限り、「俳味」に反省を與へ

るといふことは、缺くべからざる己が倫理でもあつた。併しながら、「自然歸入への徹底」、「生命感の昂揚」、「複雜新鮮な美の編輯」といふ一聯の標語には、「俳味」に關する深い理解も祕められてゐたものと思はれるに不拘、それ等自體としては未だ「俳味」の日本的特質にきびしい觸れ方をしてゐたとはいへなかつた。新傾向が自然觀照に鋭い態度を示し、刹那的に煌めく稻妻のやうな光の印象や、疾風の如く咄嗟に發する力の印象を、緊張した言葉と強い音律とによつて把へようとする主張は、芭蕉の光と力とを西洋詩論の中に解體するやうな危險もないではなかつたのである。

定型俳句の心もじき青春の喪失と共に、內在律俳句の古典性缺如は、憂ふべき俳句世界の極現象である。

こゝ數年、內在律には「さび」や「しをり」のある作品がめつきり尠くなつた。それ故、「俳味」への反省は現在の「俳句日本」に課せられた緊急の題目であるとも考へられるのである。而もこれは、新しく生れるべき第二の放哉や樹木の爲にも、又、不滅なるべき內在律俳句共通の道の爲にも、是非必要なことなのである。

「俳句日本」最近號を一瞥して得た

一にぎりは胡麻がとれさうなうちの胡麻の花かな　井泉水
決戰野菊花さきしうごくなし　一碧樓
寫經婦夫の夜々燈に寄る蟲に耐へ　卍禪子

の三句には、自然の剝り落しかたや句のもつ調べに樣式の差は認められるが、一握りはとれる。それでよいのだと豐かに思ふ井泉水氏の心にも、野菊に不動のものをみつめる一碧樓氏の觀照にも、寫經に澄む清らかな卍禪子氏の感情にも、一脈「俳味に通ずる響がある。とこゝに探求すべき內在律俳句の藝術論があり、ゆるぎなき思想と倫理があるやうに思はれる。惟ふに內在律俳句の追求すべき刻下の問題は、樣式の超克であり、黨派の解消である、ともいへる譯なのである。

新俳句論研考 (4)

俳句の世界に就いて——基礎論

西垣卍禪子

——生活希求の內在性——

新俳句作品は生命の表現である。換言すれば、生の必然的欲求としての感情（純粹感情）の表現である。我々のいふ生命に於いては、みづからの自己がその環境の內にみづからに與へられ、自己の周圍の人間及び事物に對するある樣態と立場を與へられる。生の根本的なる構造はそれが生活する環境によつて制約され、更に環境の上に作用しかへす、卽ち、生と環境との作用聯關である。（註1）

藝術は人間性の一つの個々の要素として想像の能力に基づいてゐる。しかも、それの創造の內には人間性の全體の富が働いてゐる。こ

の世界は精神生活の表現である。精神の創造力が、外界に於いて生産する變化が如何なるものにせよ、それは、人間が彼の環境との構造聯關に立つてゐることによつて、そこから生ずる內的狀態の編成に外ならない。構造聯關とは「我」を構成してゐるものである、各人各樣である我は、幾多の經驗を通じて收得されたもので、種々な收得聯關から種々な藝術樣式は生み出されて來るのである。ここに注意すべきは、收得聯關は感情を以つて基礎的な心理作用と見、漠然たる全體性の把握とするものではない。我らにあつては美を感じるままの現實でなく、世界觀からの美の實現である。)我々は體驗なる用語を以て表す領域に於いてこれを追求する事が出來る。卽ち、生は體驗せられるのである。

かくして、生自體の問題が人間の體驗そのものの內に橫たはつてゐる以上、人間の體驗の仕方が問題になり、それは究極に於いて人間的現存在の在り方の問題となる。(註2)

現存在は「世界——內——存在」(註)としての——從つて世界との具體的統一に於ける人間の存在樣態である。卽ち、それは人間の體驗そのものの存在樣態である。換言すれば、現存在は生命の存在樣態であり、卽ち、生命の本質にまさにかかる「世界——內——存在」としての人間的實存在に存してゐる。かくして、體驗は世界と人との具體的生命的なる統一的聯關としての「世界——內——存在」に於いて可能である。

されば、あらゆる人間的生命現象(我々に現れてゐる自然及び文化、總括して世界)の存在し得る根據を「世界——內——存在」としての現存在に、卽ち人間の根本體驗(人間と世界との統一的存在、これは單なる統一にはなく、根源的統一である全人的直覺の根本體驗である)に求める。

(註) 自然も人間も生活も認識も、すべて我々の現實であるとすれば、現實の原理を追求することは、最も具體的には、意味が現實を原理する働きと、本質的に意味がどうあるべきかの論理とを論理することである筈である。この論理は、世界の方法そのものの認識である。實現の方法とは、個の實現の作用を原理するところの本質必然的・一般的な實現である。かゝる實現の方法は、實現の作用に向つて形而上學的前提としての本質必然であり、基礎としての純粹一般である。作用は個のものとして我を肯定するけれども、その肯定は實現の現實的樣式であり實現の作用である。それはただ方法に方法され・原理されてこそ、作用の現實として產みだされ、その價値を主張し得るのである。

我々は、形而上學的前提としての本質必然を方法といはうと思ふ。方法は結論でなくて前提であり、現實でなくて假設である。實現を推論式とみる時實現の方法はそれの第一前提といはれる。前提は作用の同一を完結してゐない。けれども、統一によつて必然に作用を導くのである。卽ち、純粹一般であるところの第一前提が、內に第二前提の特殊を現して個の作用を組織し產みだすのである。作用は意味實現であり、方法はそれの原理としての本質必然である。始にある形式的前提でなくて、理念的に追求されるべき本質的前提なのである。この前

提される本質必然は方法の理論理性であり、實現を産みだそうとする本質必然の追求は方法の實踐理性である。この理性は作用を純粋に超越する。而して、理性が基礎として原理することから作用が實現されるのである。そこで、實現の作用のなかにこれを産みこれを實現してゐるところの理性は何か、方法は何かといふ認識は、根原の原理に働いて意味を本質にかへりみ、作用を方法に基づけて、本質的方法そのものから作用を意味する方法を認識しなければならぬ筈である。この認識こそ方法論としての哲學である。

我々新俳句作品に於ける基礎としての課題は（生の契機的方向として）第一にかかる意味の存在問題である。從つて「世界――内――存在」としての人間的現象の様々な在り方を究明する。

（註1、2）ここに注意すべきは、西洋流の美學が主客の全き融合を説く場合、我々が直接知覺し得るものは事物の形態に他ならぬから、感情移入と云ふ本元的な作用を假定し、事物の形態を知覺すると同時に、我々のうちから「生」内容の移入を行ひ、「内的共爲」と云ふ主客の協同作業を豫想するのが舊來の鑑賞體驗であつた。而して、この總體的な氣分體驗が綜合し、構成する所謂「全體内編入」と云ふ態度（共感）を作用聯關と皆つては考へてゐたのである。だが、眞の共感はそこにはあり得ない。尤もこの感情的なもの、全心的狀態が擔ふ一種の全體性は、人間主觀の構成活動を俟たずには主客の融合は不可能とするが、はたして融合が簡單に行なはれるかどうかは問題である。感情移入は「他我」の存在をまつたく觀念するもので、そこでは自我の存在は確實でも、他我の存在の證明は不確實なのである。即ち、感情移入によつて自我の分裂が行はれ、本來の自我から岐れた新しい自我が外に向つて移入されるが、それは飽くまで自我の岐れで「他我」ではない。感情移入された自我を何の權利があつて「他」として認定するかが疑問である。で、ここに超個性的精神全體性の假説が建てられる。この全體性は頭腦的に統一せるものであつてはならない。一つは心的な、一つは物的な氣分を一應は區別しつつ、その區別を或る仕方で止揚して、より高き統一にもたらすものでなければならぬ。ここにこそ我らの無限絶對的生命の問題があり、「無我」にして始めて主客の融合を可能とする物心一如の絶對境（共感）の把握があるのである。大自然はすなはち私、私はすなはち大自然、となる優越の根原的統一が存するのである。

（註）純粋な本質直觀の體驗はA＝Aとまつたくうちに反省して、「我」の論理をひらき行ふことにある。それは同一の原理に於いてであつて、この同一にはたらく論理は、本質直觀が我に於いて我を對象として確めることによるのである。體驗は單なる現象ではなく、精神生活として充實した現實性を有し、精神生活が最も優越なる意味に於ける統一であるところの根據がある。心的生活過程は原始的なる形態から最高の形態に到る迄一つの統一である。それは部分から合成されたものでなく、又、感覺元素、あるひは感情元素の協動の結果ではなく、根原的に、そしてつねに優越なる統一なのである。

指針を記す（五）

中塚一碧樓

小磯首相のまき舌が頼母しかつたり牛蒡の種蒔する　鈴木あつみ

小磯首相の演説をきいて、その巻き舌を感じてゐる人はかなり多い事と思はれる。大體「まき舌」の言葉が出ると、或る力強さを感じ、また或る親しみを覺えるやうである。作者が「頼母しかつたり」と云つてゐる心持は實に賛成である。さうして作者は「牛蒡の種蒔する」と云つてゐる。牛蒡の種を蒔くといふ事は物種を蒔く中でも至つて地味であつて、こゝに又或る質實のちからを感じられる。「首相の巻舌」の頼母しさを覺えながら蒔くものが牛蒡の種である事は、丁度にしつくりとしてゐる様である。心持の張つた一句。

秋の日射船をあやつる兵に波に　安田兎晴

近時かうした情景は常に僕達のよく思ひ描くところであるが、此句は句末の「波に」によつて其情景が如何にも生き〳〵と表現されてゐる。日射が「秋の日射」である事も一句を引締めて句に深さを持たしめてゐるやうである。眞に此兵をおもふ時、僕たちも何とか力を合してその舟をあやつりたいとさへ思はれる。さうした差し迫つて來る心持を與へるのも、やはり「波に」といふ表現が鮮かであつて、今、秋の日射が波に光つてゐる其光りを感じ得る處から來るので、之を句表現の妙味とも云へるであらう。

大勝と知り一筋の徑が秋空へ　廣井義弘

「一筋の徑」が、それが「秋空へ」である事は大きな氣持であつて心率かれる、誠にこの一筋のみちこそと、さう思へるのである。「大勝と知り」といふ氣持も、構へず平常そのまゝに云つてをつていゝと思ふ。日々朝夕、いつも〳〵戰局に心を致してゐる事が自らに此言葉の調子を持ち得たのである。

好ましい一句。

窓青くしぐれをる工具揃へる　守矢日出男

何の工場であるかは一寸判らないのであるが、この一工員は如何にも靜かに張り切つてゐる事が表はれてゐて、必ずや最も的確なる仕事を靜かに迅速に仕上げるであらうなどと思へる。「窓青くしぐれをる」は全く確かりと心の落つきを持つてゐて、之でこそと思はれるのである。

「窓青くしぐれをる」といふ所からか、一句から或る若々しさを感ぜ

しめる、此點もいゝと思へる。

草を刈り草を背負ひ雫する朝　井上一二

身も心も、さうして大氣も、天地澄み切つてゐるであらう朝が思へる。此場合「雫する」といふ事は一つの象であると同時に一つの情を叙してゐて良い表現である。「草を刈り」「草を背負ひ」と「草」を重ねて云つてゐる處も、かうした時少しも差支ないし、僕には却てウブな氣持さへ感じられる。「俳句は短いものであるので、一句のうちに同じ文字を重ねて使ふ事はどうかと思ふ。それは損であらう……云々」といふ様な事をよく聞かされるのであるが、「句はそのやう理責めには行かない、さうした常識的判斷ばかりでは、詩は、句は片付けられる譯のものでない、詩は生きものであり、言葉は生きてゐるもので……」といふやうに答へたいのである。

更に此作者の句に「神にささげむ御ン粟の一ト穂を剪り」といふのがある。この敬虔な心持よろしく、一句のもの言ひぶり靜かで好もしく思ふのであるが、「御ン粟」と云ひ「一ト穂」といふやうな字の使ひ方は一考を要すべきではあるまいか、古來、俳句にはよく斯のやうな字の使ひ方があり、僕の畏敬してゐた一先輩も、どうもこのやうな字の使ひ方を好んで用ひてゐたやうでもあつた。之は一些事であるとし或ひは之を「俳諧ぶり」として片付けず、かうした所も眞向に考へて見たいと思ふのである。これは此句の作者にのみ云ふのでなく、多くの同人達に話したい事であるのは無論である。

枯草なれば松葉杖なればわがあるく　村上幸々

傷痍勇士の作であるが、一句に何等人を誘ふ風の言葉もなく、たゞに「松葉杖なればわがあるく」と實にあつさりとその儘に述べられてゐる。こゝに其心境の崇高さを見るべく、此一句が僕達に堪らない感銘を與へる所以でもある。

「枯草なれば」といふ言葉も地味ながら其底に漲つてゐる詩情がうかがひ得て成功した表現といふべきであらう。

一つの林檎をわけて食べみんなりんごを食べり　山田蒲公英

一見平凡句のやうであるが、此一句の持つてゐる心の和やかさに心ひかれる。事柄としては句の示す通り「一つの林檎をわけてみんなで食べた」といふ事だけであるが、「わけて食べ」と云ひ、「みんなりんごを食へり」といふ言葉の出方に據つて作者の心持のいかに優しきものであるかゞ窺へるのである。

之は如何にも作者の人柄が自然と出てゐるとも云へる。句は事柄の如何によらず、一句は實に句ごころの如何に據るのみである事が今更ながら考へられるのである。

炭を焼きながら

井手逸郎

このごろ炭焼小屋にきてはたらいてゐます。竈をつくることも面白いものです。炭をつくることは一層面白いものです。いこりのまだわずかにのこつてゐる炭を、炭ほこりを立てながら、竈から出すときの面白さはちよつと言ひあらはしの術のないものです。竈から昇つてゐるかげらう、秋日は靜かに三つ並んでゐる百俵竈のまるい甲羅を暖め始めます。煙は淡く淡くなつて切れかけます。私はこの竈場の小屋の中でちよつとした暇を見つけて「俳句日本」を出してよむことがあります。その時の樂しさは、句を作るときのたのしさよりも違つて、秋日の中にとけこんでゆくやうなたのしさです。そのときの私には「俳句日本」の凡ての作家が親しく愛すべきものになり、凡ての評譯にも言說にも無我の氣持で入つて行ける氣持があり、またそのやうに「俳句日本」をたんのうし了せるのです。つまり私には陸、海紅、層雲各派の特色が色濃く出てゐる編輯ぶりが面白いのです。そしてその各派の配置も互讓であつて好もしいものに見うけられますし、戰爭が自由律俳句をこのやうにしたことに對してつゝましい受け入れ方を示す一方に於てはみいくさに對して作家のまごころも充分に表はされてゐます。つまり陸海空三軍は各々の持場を把持して勇躍出動の形に見えるのです。私はこの樣子に心がをどります。自然に句作りに懸命になれます。私は私の眼の前に三つ並んでゐる炭竈が仲良く並んでゐてもくもくと煙をあげてゐる有樣が丁度「俳句日本」の現狀であると思ひます。私は無我の氣持で毎日生活してゐます。もとより決戰は私をとりまいてをります。私は敎鞭をとる代りにまつくろになつて炭をやいてゐます。この炭が戰力に役立つことを考へるよりも、かやうに樂しくはたらけることが日本のお役に立つてゐることを思ひます。さすれば「俳句日本」の存在も、それから私の童心から生れる俳句も眞實の地盤をもつものと言へませう。刻々の戰力であります。增產の源であります。私の童心は今日もはや炭竈以外のものを見てはゐませぬ。炭竈の一姿一體以外に私の句はありませぬ。竈をとりまく雜木の色も山のひだの秋の影も一雨ごとに深くなつて行きます。私は純粹無雜炭焼きになりきらうと思ひます。私は「俳句日本」がこのうへ共に純粹無雜に育ちゆくことを確信いたします。凡ては童心です。成心はいけません。童心が勝ちぬく源です。童心の行の中に自ら「俳句日本」の行くべき姿は顯れませう。その姿は想像を絶してゐます。

ただ今日私の童心の思ふところを述べますれば、「日本」三派はもはや派ではありますまい。「俳句日本」の旗印の下に戰ふ家の集りです。そしてめいめい決戰の生活の中からの俳句です。「陸」のプロザイスム、「海紅」の抒情、層雲の肉づけの味ひ、これらは一つ一つ大切なものとしてさうして大きく和合されてゆくものではないでせうか。三軍の統帥は、內からのこの大和の力の外にはありますまい。（新嘗祭の日）

千人目の白痴

西東八十八

いま、僕は俳句會の一隅にゐる。生れて初めての經驗である。胸奥を去來する感想を書いて置かう。しかし、物珍らしさうに、こんなことを書かうとする僕は、或ひは『千人目の白痴』かも知れない。

あらゆる文學的作品がさうであるやうに、俳句は、その『讀まれ方』によつて進むものである。『讀まれ方』が停滯する時、俳句も亦其進歩を止める。そして一つの型に落着かうとする、その殻を破つてなほ前進を續けてゆかうとする所に『我々の道』の流水的革新性が求められ、『我々の道』本然の生命がある。この源は、『自然の扉』が開かれ、『生命の木』が芽ばえたところに探つてみればよい。

俳句を生む者は、俳句を讀む者である。そしてまた、讀む者は生む者である。そこに、自ら『讀まれ方』が生まれる。一句一律の確固たる信念と、その信念の受ける感激とが、『律』を奏で、『句』となり、『句』が神韻に和して、その句の生ぐる限り自律を發して『讀む者』に句の生命をいぶきかけてやまないのである。

句會は『讀む會』である。少くとも提出された句は、よく讀むならば判り得る句でなければならない。同時に、判り得る句とは即ち先づ『俳句』でなければならないのである。いかによく讀むでも判り得ない『俳句』といふものがあるとすれば、それは『俳句』ではない。問題はよく讀むの、よくにある。よく讀み得ない者にとつて、判り得ない『俳句』も十分にあるからである。俳句をよく讀む爲には心眼の澄明が要求される。或る者がよく讀み得て、或る者が判り得ないとする句があるならば、前者の心眼は後者のそれより透徹する力をもつてゐるといふことが出來る。ただ、その澄明度が、單に經驗の累積によつて高められてゐるに過ぎない場合もあり、必死の修業と努力によつて磨かれ深められてゐる場合もあり、天與の神光に句裏を見るの明か眞へられてゐる場合も亦、稀にあるといひ得る。

一句一律は、然し一つの陷穽を持つ。それは作者が其句の爲に最も自然なる律とするものを選び得るといふことである。平易にいへば何を如何に詠むもよいといふ錯覺に陷らうとすることである。實は、一句一律であつて數律ではないのである。選び得るといふ事も唯一の律を發見することに他ならないのである。かゝる事への內省が、短律時代を作りかゝる事への勇氣が、長律時代を拓いたといつてよい。

然し、こゝで僕が短律といひ長律といふ場合と、單に律とのみいふ時とは、その內容を、いささか異にすることを、いふて置かねばならない。內在律の歷史に於て其の一時期を稱して短律時代といひ長律時代と呼ぶのは、當時の句の字音——一句を成す字數によつてであるが、單に律といふ時は、その字音の數のみを意味しないことは、その字音の音韻的に含むAEIOUが檢討されなければならないのでも明かである、けれども僕はもう一皮深く切り込んで、感じてみたい。即ち、

AEIOUの中に長短があるといふことである。それは發音的にであり語感的にであり且つ造語的にである。そして、それらが、晶華して一句を結ぶ時に、その位置からの音韻的放射と、その作る語感的陰翳と、構成的な抑揚の周圍への浸潤の濃淡、光度、重量が感じられるといひたいのである。

偖て、句會は一つの面白さを見せる。初心者（修業年月ではない＝十年の初心者といふ者もある）は有段者（中位以上の者といふやうな意味である）の句に感服するか、或ひは判らないか、である。有段者の中の或る種の者のみが、高段者（既に一境地を拓らき且つ前進を續けてゐる人々）の句を味はひ得るといふことの實證をまざ〳〵と見せてくれることである。即ち、互選の結果を選者別作者別に統計すると數學的に答が得られる。つまり、句會に於ける高點の句は其選者を見ることに據つて割引されてよく、低點の句、必ずしも低度ではない。

互選のほかに最高指導者、名人の特選こそ句會に望ましいのである。また、例へば互選に於ける五句選といふやうな制限は定型的である。點數を切符制にする爲に必要な平等的方法かも知れないが、十句以内とか五句前後とかにする方が、一句一律的であらう。ありていにいへば、共鳴の句がなければ一句も選ばぬがよいのである。その方が流水的に、句に忠實である。ひとから五點の配給をうけるから、こちらも五點供出するといふ時功利的な、社交的な、一種の贈答的なものが感じられてならない。斯る方法は和合的、親愛的の眞なるものより遊離してゐる。ひとの平凡な十點に對して眞實の一點を返すだけで十分である。我々は常に清新で元氣で潑剌と、句道錬成をつゞけたいと思ふ。

僕は句會の片隅で一杯のお茶を啜りながら諸君の句評に耳を傾けてゐる。

（未完）

觸れ合ふ力

秋山秋紅蓼

本誌もすでに半歳を經過した。『俳句日本』としての我等の出發が、我等の信ずる俳句の道を通じて、この戰ひに勝ちぬくためのお奉公を第一義とする以上、區々たる結社意識などに執着すべきでないことは云ふまでもないが、たゞ、その實踐にあたつて如何にそれが效果的になされるか否かに問題はかゝつてゐる。本誌のやうに幾つかの結社に依つて統合された場合では、組織や方法に依つて一本の旗印に結集するといふことは難かしい、然し、お互同志が堅持する目的は一致してゐるのだから、其目的に向つて精進すれば必ずや效果は擧つてくるにちがひない。現に私の感じたところでは、僅に六號だけの發刊ではあるが、その發表されつゝある多くの作品が、最近に至つてよくその特徴を認容し合つて勉強してゐる態度が、看取される。これは、一面に

於いて幾つかの結社の集合である本誌が、俳句道場としてのいゝ役目を果してゐることの證左である。定型に於いては、十七音型態そのものについては全く一致してゐるのだから、幾誌が合同したところでその點は心配ない。然るに、本誌にあつては、定型を揚棄してゐるといふ上では一致してゐることだが、其型態の上では、まだなか〳〵距離があるやうである。それは、定型のやうに外からのものではなく内からのものであるために、その差は質的になつてゐるから難かしい。一句一律といふ型態は、各作者の氣質的にかゝつてゐるのだから、お互に練磨されてゆかなくてはならない。で、定型のやうに簡單に一本の旗印に集まることの至難の半面には、この質的にさへ相違せる力の反發があつて、そこに、今までに無い異質的のいゝものが生れて來はしまいかと考へられる。で、この觸れ合ふ力がほんものでさへあらば、必ず打てば鳴るやうな作品が生れてくるにちがひない。之れは我等の努力の如何に依つてはいつ湧出するかも知れないが、兎に角、お互に謙虚の心を以つて、やがて本誌の仕事の結實の日を信じつゝ精進するより外ないと思ふ。

昭和十九年の回顧

奥村四絃人

世界戰史上、いまだ類例なき苛烈さの頂點に達しつつある現大東亞戰爭下に於て、吾々の生活樣式は急轉直下、素晴しい變化を見せた。從つて奢侈、華美の風習は時代錯誤として抹殺され、鐵の樣な質實剛健さを以て實踐躬行する風が俄然擡頭した。そしてあらゆる日本人の風俗に、行爲に、思想に、太く逞しい絶對不破の無形無音の巨大なる流れを視るに至つた。美術の上にも、演藝の面にも、音樂、文學の中にも、この巨大なる流れを感得するに、餘りにも明かな程の鮮明さが覗へる樣になつた。そして理論よりは實行、複雜より簡單へと突進して來た。斯くして國民總蹶起と共に、何が何でも完勝の一點に向つて驀進しなければならないのである。其の秋に當つて、吾々は率先して統合し、こゝに目出度くも「俳句日本」の誕生を見るに至つた。

ところで遂先頃、私は一農人と談した事がある。彼は私に「俳句など作つても更に空腹を滿し得ないではないか」と、誠に至言だと思つた。「詩を作るより田を作れ」とは多くの農人の聲であらねばならない。然し吾々とても寸暇を得ては土を起し、種子を播き、自給自足の補助耕作に全く餘念はないのであるが、以上の言葉は、其の職域の金言であつて、船頭は舟を操縱するを以て第一とし、潛水夫は水中深く沈んで作業する事を能事とし、軍人は國家を守護し、敵を擊破するにある事は今更喋々する迄もない事である。從つて吾々俳句道に志す者は、戰線銃後の別なく、力戰奮闘する多くの將士を、產業陣營に晝夜の別なく機械と取組む戰士諸君を、又其他の人々に對しても、心の糧とし

て、國民思想昂揚の一助として、この單詩篇を以て大なる喜戯劇たらしめんとするに他ならないのである。

軍人は武を以てのみ足るものではない。文武を以て兩輪と爲すべきである。人間は物質のみで生きられるものではない。心を潤ほす何物かを要求して止まないのが一般である。音樂に、詩に、短歌にと心は動く。然し極めて單簡にまとめ易いのは俳句ではなからうか。我田引水でなく、率直に感じたものを端的に表現し得るものは俳句が一番親しみ易いのではあるまいか。特に古典的から蝟脫した現代人としての吾々の新俳句こそ、正に大いなる活舞臺と謂はねばなるまい。

かうして俳句を作る事は、一面自分自身に「うるほひ」と「のびやかさ」が培はれる事である。また俯仰天地に恥ぢざる魂が知らぬ間に宿り、觀察力、決斷力が發達する事も體驗上淺く確認される點である。

私は決して花鳥諷詠を排擊する者ではないが、然しそれのみに終始する者は排擊する。特に時局に卽應した作品を見て、一概に便乘主義と罵る輩も亦排擊する。何となれば、苟も日本人である以上、此の重大時局に直面してありながら、それが俳句に種々な內容を以て現はれるのは、當然過ぎる程當然な事なのであり、最も自然な發露と云はねばならないからである。

兎もあれ聲價のもとに於て、雄々しくも統合誌「俳句日本」が昭和十九年に呱々の聲をあげたと云ふ事は、日本人の餘裕と、襟度の顯現でなくて何んであらう。

謹んで私は皇國のいやさかを高唱すると共に「俳句日本」の健全なる發達を祈念し、隆々として樞軸國全土に迄、この誌影を見るに至らん事を切望して止まない次第である。

俳句日本に寄す

內田南艸

俳句日本……この名前を聞いただけでも、新鮮なひゞきと、生々發展してやまない氣魄を感ずる。

昭和十九年俳句雜誌の整理統合により、新誌「俳句日本」の誕生したことは正に俳壇の歷史を劃するものであつた。而もこの統合は、どこまでも白紙統合であつて、一結社を中心とするものでない。從つて、そこには舊來の關係は解消され、皇道精神に基く、新俳句作家の同志的結集をめざす新結社の誕生であつた。

大體自由律雜誌の整備に關しては、西垣君の獻身的努力を忘れることが出來ない。恐らく西垣君のやうな大努力家がなかつたならば、今頃は自由律俳壇はどうなつてゐたか解らないのである。

凡そ何んの藝術によらず、公的發表機關がなくては、その藝術の普

遍性は勿論、延いては永遠性も期待出來ない。殊に俳句文學に於てはその感を深くする。從つて、ノートか紙片に書き留めて、獨り喜ばやうなことは、今日の印刷文化を解し得ないものといふべく、新時代の藝術家の採るべき手段でない。新文化の創設をめざし、俳句人としての肇國の精神を顯揚し、皇道を翼贊せんとするものには、公的發表機關の存在が絶對に必要である。

此の意味に於て、「俳句日本」の發行は、我々の藝術の作品發表機關として、どこまでも育成せなければならない。作品に就ては大體陸社系に關する限り、主として酉垣君が擔當せられるが、少くとも老成した作品よりも、新進發剌とした作品を要求したい。即ち完成したものよりも、將來に伸びる力を持つた未完成の作品を欲求したい。大東亞戰爭は、民族と民族の戰爭であると同時に青年と青年との戰爭であるといふことも出來る。青年の熱情と感動がなければ、この大戰爭を勝ち抜くことが出來ない。新しい歷史の創造は青年によつて成就されるのである。未完成の青年こそ新時代の至寶である。此の意味に於て「俳句日本」誌の同志は、當然青年層に向けねばならぬと思ふ。そして、青年の心の內より迸り出る國民的感動を詠はしめねばならぬと思ふ。俳句日本は不斷の若さを持つた、同志の結集であらねばならぬ。

俳句日本は全自由律俳壇の公機たる俳句研究雜誌として、今年は構想を新にし、堂々と出發していたゞきたい。

大東亞戰爭も、比島レイテ島をめぐつて、愈〻決戰段階に突入し、神國日本は防禦態勢から攻勢に移らんとしてゐるのである。我々の俳句日本も前年に於ける過程期より、今年こそ光輝ある前進を期待するものである。

聖戰と俳句日本人

細谷不句

大東亞聖戰は吾等四千年の有史以來未だ嘗て無き大規模のかたちで實に生死を賭して闘つてゐるのである。

われらの亞細亞が過去の永い間、歐米文化の爲め理不盡に抑壓せられ、亂暴に搾取せられ、わが日本までが甚だしく壓服せらるゝ有樣であつた、がしかし亞細亞は五六千年の歷史的傳統を有し、特に學問に於て宗教に於て藝術に於て人類の欲する總てのものを供給し來つたのであつて世界文化の母ともいはれてゐる。いかでか斯かる抑壓に搾取に限り無き侮蔑に覺醒せざることがあらう。大東亞聖戰は正に闘はれたのである。

彼等歐米の白色人中にも亞細亞の光を若干認めたもの無いでは無い。アーノルドの如き、佛陀を書いたオルデンブルグの如きはそれであるが、ホンのそくばくの個處を認めたに過ぎぬ。獨乙人カイゼルリングは高野山に登り、奈良に遊んだりして哲人日記を吾等に示してく

れたが矢張りわが邦のところ〴〵を認識した事は過ぎなかつた。たゞカイゼルリングはわが邦の土に親しみ草木に泥んだ點に於てそれだけ前二者に幾分勝つただけはあつた。

畢竟するに亜細亜は一つなりといふ事、亜細亜は一家なりといふ事は大東亜人の手によつて實現されねばならないのだ。特にわれら日本人の如き「もののあはれ」を靈感する心の持主であるものに依りて、最も的確に事實上に示さるゝのである。かくしてこそ大東亜十億の魂と魂との結びつきも出來ねばならぬ。「もののあはれ」を知る心の露ほども無い歐米の輩の手を觸れるべきでないのである。

倫敦まで出掛けて行つて亜細亜は一なりと講釋した岡倉天心は日本人であつた。氏はこの外にいろ〳〵と亜細亜の光を發揮するものを人に示されたが、茶道のことを談じた一書がある。われら日本人が讀んでは特に感得するふしも無い。恐らくは是れ歐米の白色人に示さんとしたものと思はれる。これを繙讀した後に、惟ふに、茶道のことなど味讀すればするほど、茶の香りの外に、もののあはれを催すところ無くてはならぬ筈である。然るにこれが殆んど無いのは、アーベーセーデーの横文字に綴つたことが大いに與つて力ありしかに覺ゆ。かういふものはどうしても假名文字にも、いろは文字にも綴つて、且つ繰返し〳〵味讀せしめねばならぬと思はる。われら日本人にして且つ然りである、彼等歐米の白色人にありては遙かに末であつて、蓋し三四十年の一生をわれらの邦土に確かりと立つて猶ほにち〳〵山川草木に親しんだ後でなければ感了しないであらう。

ラフカヂオ・ハーンは何人も知るが如く、三十有餘年もわが邦土上に眞摯な生活をつゞけ、遂にはわが日本人に成りをほせた小泉八雲である。彼の出雲に於ける住宅などは全然日本の士族屋敷の一つなのであつた。彼はここまでに生活し安易になつて居られたのであつた。こんな生活上の外形的表現を別にしても、彼のいろ〳〵の著述のうち、「心」「花」「妖怪談」の小品類を讀めば彼が相當にわれら日本人に親和したことが知られる。彼がとき〴〵住宅を出でては晴天の下に近所の子供等と「夕燒小燒」を唄つたことも有名である。三十有餘年の日本人生活をつゞけ〳〵た彼はかくて「もののあはれ」の心を身につけたと見てよからう。かくていや彼はわれらの言ふ歐米の白色人では無かつた。ハーンの生れたところはギリシヤの本島を離れた寧ろ小亜細亜の一島嶼であつたといふ。彼のからだにも矢張り亜細亜人の血が流れてをつたのである。それでこそ三十有餘年の生活で假名もいろはも味讀する日本人に成りすましたのだと思はる。

ここで大東亜聖戰の根本に溯りその目標を言はねばならぬ、が、この事は日本人の一人々々とまではいはぬが、少くとも俳句日本人ならば、既によく會得してゐよう。卽ち亜細亜十億の民族の一人々々をしておの〳〵そのところを得しめ、魂と魂とをがつちりと結びつけしめて、天與の資源を利用し合ふて邦土を培ひ、もつて同生共死——共存共榮の生活を營み得しむる事に外ならぬ。而して共存共榮の生活といふも永遠にたゞ安易であるのみではならぬ。悠久に確乎たる生活史を綴らねばならぬと思ふ。それには歐米の支配や歸屬から全然脫却して、

亜細亜諸民族打つて一丸となり。以て民族的生活を完うするのであり、亜細亜を中心とする眞の意味の世界的生活史を確立すべきである。而してこの生活史のうちには昔ながらの亜細亜文化の血潮が脈々として流れなければならぬ。この文化の血潮の醇のじゆんなるものこそ「もののあはれ」を靈感するの心これである。俳句日本人の一人々々はこの心をぴつたり身につけて居られる筈である。この心をにち〳〵培育し、深くさうして廣く發揮せしむるは勿論、既に一家である大東亜の人々の魂へ入らしむべきである。これが俳句日本人の聖戰下の責任である。

もののあはれを知るものこそ直ちに眞珠灣の底深く入る特別攻撃隊ともレイテ灣上の神風隊萬朶隊ともなり得るものなれ。

開目鈔

荻原井泉水

旦那さん作つた菜がようできて旦那さん饒舌してゐる

岡野宵火

現代風俗詩とも云ふべき句。ちかごろ、新しい川柳が一つの風俗詩の領域を開かうとしてゐるらしいが、此の「旦那さん」の句は、風俗の中に、風景があり、さうして旦那さんの人柄や氣分といふものが滲みでてゐる。それで俳句になつてゐる。今日の川柳では、こゝまでは踏み込めない。是はやはり俳句が傳統的に繼得してきた詩境なのである。元祿、天明の頃の俳句には、人間生活の中にある朗かな微笑、いはゞ日本的のユーモアを、明るい自然の裏付けを以て、一つの味ひとして生かしてゐる。さうした味ひは、現代に於て、新しく檢討し新しく認識して行くべきだと思ふ。尤も此の「旦那さん」の句は、古い時代の句から暗示されたものではなくて、全く今の時代の目で見、今の時代の心で感じた作品である。季節は、季語としては出してないが、秋の朝をおもはせる。我々の句は、概ね一人稱の作であるが、此句のやうに純三人稱の作も、大に試作して行くべし、面白いとおもふ。

家の前海が母のやうなしづかな朝を征く

内久根聖已

此句は文法的には一人稱に書いてあるが、「彼」といふ主語を略したものと解してもよく、或は彼其人の氣持に作者が乘りうつつて書いたものと解してもよい。作者の弟さんが出征した事實があるから、恐らくは其時の氣持かと思ふ。さうすると「海が母のやうな……」と感じが、作者自身とも共通して、一人稱そのまゝ三人稱の作だとも云へる。海を母のやうなと感じた氣持は、既に一茶（文化九年）に——

亡き母や海見る度に見る度に

といふ句がある。君も一茶の句は、信濃の山奥を一歩も出でずに死んだ母に海を見せてやりたかつた、といふ心とも解せられる——。此の「家の前」といふ句は、海は荒れさわぐ日もあるが、靜かな此朝のやうな海は、おだやかに大きな母の愛を感じさせる。その朝夕に親しんだ母のやうな海をうしろに、而して肉親の母その人をもうしろにして、出征して行くといふ氣持である。それは、うしろ髪を引かれるやうな氣持ではなく、大きな愛がいつも自分のうしろにあつて、見てゐてくれる、護つてゐてくれるといふ安穩なる氣持である。出征の句としては、かういふ靜かな句もめでたいとおもふ。

ふゝきをもどりこうもりくろいひらいておく　高橋良太郎

一本のかうもり傘、且に持つて出て夕べに持つてかへるかうもり傘といふものに、此の人の手のぬくみが感じられる。愛とか親しさとか云ふ言葉で說明すると、あまたるく息はれるかも知れぬ、生活と云ふ言葉で說明しても云ひ盡し得ない。詩をさがさうの、句を作らうの、といふ氣持ではなくて、其物、其事がそのまゝ、其時、其處に於てぴつたりと現象づけられる。其時、つつましく、取り上げられたといふ風の句である。吹雪の爲に眞白になつた傘を戸口で强くはたくと、雪はすつかり落ちたので——「こうもりくろい」といふ表現は印象的である。家の內からは、細君の聲もきこえるらしく、夫に應へる氣持もあつて——「ひらいておく」といふ表現には人情味がある。

古本屋で、古本の中からの花で、ある秋の日　宇佐美一歩

場面は說明するまでもないが、ふつと手に取つてページを開いてみた中から出てきた花の捺し花、以前にはどんな人に讀まれただらう、と其花を通して其人を想ふ氣持——それもあらう。だが、野の道をあてもなく散步してゐて、思ひがけなくも足許に見出した一輪の花にほゝまれる氣持——それであらう。それでこそ「ある秋の日」と據ゑた言葉が好く生きてゐる。此句、コンマを二つまで使つてある譯は、內容の氣持が二段的に飛躍してゐる其のリズムを出す爲である。作者は先づ古本屋に足を入れた、顏の前に壁立する書棚にギッシリと詰まつてゐる本、本、本の背文字、それに明るい午後の秋の日を感じた、それだけで一つの句にもなる、と思つて、本から本を漁つてゐるうちに、一つの本の中から一つの花を見出した、そこで、前の感じに輪をかけたやうに、明るい午後の秋の日を感じた。かういふ氣持のリズムである。

青い菜の列日なた日かげ竹馬のこども　加藤裸秋

名詞をベタ〳〵と並べて置いたやうな句であるが、それがそのまゝ、此の街の場末らしい雜然とした風景を感じさせる。だから、斯うした表現も一つのリズムである。「青い菜の列」といふから、廣々とした畑地かと解する人もあらうか。だが「菜の列」といふ言葉は、二筋三筋

列んだといふ感じであつて、いはゆる一坪畠である。その上「日なた日かげ」とあるから、其あたり家が建ちこんでゐて、畠もとかく日蔭になりがちなのである。「竹馬のこども凧揚のこども」も、狹いところをお互にからみ合ふやうに入れ違つてゐるので、それらが一緒にレンズの中に收められたのである。大體、風景の句ではあるが。美しく整つて觀賞される風景ではなくて、日常の生活の背景をなすところの風物であるだけに、一さう自然味をもつてゐるところに力がある

冬は川原も、ずうつと雪の高みが發電所の落差

富山實治

立體的に表現された句である。一體立體的の表現といふことは、明治末年の新傾向運動以來、俳句の時代的の新しい手法として注意されてきたものゝ、さて果してほんとうに立體的に出來てゐる句といふものは無かつたので、たゞ、在來の平面的の觀察に幾分かふくらみが付いてゐる程度だつた。層雲になつてからも、色々と新しい表現技術が研究されたものゝ、是はなか〳〵難かしく、且つ夫程、その技術に力をいれる要もなからうとも考へられてゐた。だが、此の「冬は川原も」の句は、其點では見事に立體的の表現に成功してゐる。「冬は川原も」といふのは、冬の川原を見ただけでなく、冬は木立も部落も何もかも枯れ枯れとした中に河原も亦かれ〴〵としてゐると見たのであつて、此言葉だけで一つの平面をもつてゐる。その平面的の視野の視線を左右より轉じて、前後に伸ばしたのが、次の「ずうつと」である。ずうつと前方を遠くまで見渡す。と、節方は「雪」が積んでゐる。峽谷がだん〳〵と「高み」に奥深くなつてゐる。其高みに「發電所」がある。雪の白い中に發電所の大きな二條の黒い鐵管は印象的であらう。鐵管は上から下へ殆ど垂直に立つてゐる。この上下の距離が「落差」である。上に「ずうつと」と前後に伸ばした視線が「落差」の所で上下に振り向けられてゐる。斯樣に、左右に、前後に、上下に、と其描寫は全く立體的である。「落差」といふ抽象的な言葉を用ひて生硬の感じのない點もよろしい。附けて云ふ。俳句として、平面的表現と立體的表現と何れが好いか、といふことが問題ではない。たゞ、表現の自由性を貴ぶ。技術の濶達性を貴ぶ。俳句が一つの藝術である以上、表現技術といふものは句作鍛錬の目標である。前時代の不可能を今は可能となしてゆくところに、勉道の進歩といふものがある。

灯して節分の家が、雨止んだ學校のまはり畑け

藤崎麥村

畑の中にポツンと灯した家が一軒きり、其邊家がなく、少し離れて學校が一棟、その邊りにも家がなく、畑けばかり。時間には來る電燈が其の一軒家を灯したものゝ、日はまだ暮れてはゐない。晝過ぎまで降つてゐた雨がやんだので、大分に日が伸びたといふ氣持がする程に、あたりはまだ明るい。かうした早春の風景が實にすつきりと書かれてゐる。「節分」といふ感じもピツタリと出てゐる。「灯して早春の家が……」では、是ほどに出ない。其家から「鬼は外」の聲がきこえ、窓

から鬼打ち豆が飛出しさうにさへ思はれる。机の上で「節分」を考へたものではなく、恰度其日が節分であつた爲の實感ではあらうが、夫を卽座に捉へ得たといふことは、通りがかりの拾ひ物ではなくて、平常句境の鍛錬が出來てゐたからである。「寫生」といふ言葉があるが、此句の如きは寫生の句の上乘のものと云つてよろしい。

東京で花が葉になるまで、お濠にふる雨　飯尾青城子

「冬は川原も」の句のコンマは、幾何學的の面を出してゐる。「灯して節分の家が」の句のコンマは、距離を出してゐる。其他に、コンマは全體と中心との關係を出してゐる場合もある。又、空間と時間との關係を出してゐる場合もあり、又、時間だけを出してゐる場合もある。さうして、爰に擧げた「東京で花が葉になるまで」のコンマは、夫等とは又違つて、時間と其中の一時との關係を出してゐる。此句の意味は、東京に花の頃に來て、其花が葉になるまで滯在してゐた。其中の或日、外出してみると、お濠に雨がふつてゐたといふことである。此雨は其日だけ降つてゐた雨ではなくて、梅雨がまへに降りつゞいてゐた雨である。だが、自分が滯在してゐた期間中、降りつゞけてゐた譯ではない。かうした微妙な差別、卽ちニユアンスといふものが表現されなくては、ほんたうに自然の感じは出ない。そのニユアンスをコンマで出してゐる。若し、此のコンマを除いて——「東京で花が葉になるまでお濠にふる雨」としてしまふと、其雨が花を葉にする雨だといふ風になつて、雨が降りどうしになつてしまふ。さうして、自分が東京に滯在してゐる間の印象としてのデリケエトな氣分などは、全く表現され得ないことになる。

聖戰と吾等が所嚮

喜谷六花

銃聲きこゆる壕に色づきし實一つ二つあり　けんいち

大陸前線に戰ふ人の作として、その綽々たる餘裕と、底力とを以て詠まれてある、軍人になりきつてある動ぎなき態度に敬服する、この態度あつて始めて戰陣怱忙の中、かゝる落付を見せ得るといふものであらう。擊敵前の營舍に在つてか、或は行軍中の觸目であるか、彼の神風特攻隊の勇士が、出攻の前夕、合歡草を弄びつゝ樂むでゐたといふ、無我な心境と相似たものがあると謂へよう、寧ろ溫雅な相貌を持つたこの作者も、今や雄偉な面魂となつて、必勝の鬪志を昂らせてゐることであらう。

戰爭を咏じた句は、おしなべてその的確さに於て、その溌剌さに於

て、銃後の吾々は、前線出征の作家に、一籌を輸するものあるは止むを得ない、或は觸目の一些事を取扱つたであらう句も、戰地の人の作は何か活々として、身近さが感じられるに反し、吾等の句には作意が見えたり、理智が手傳つたり、輪廓的な物足らなさを覺ゆるものが多い、熾烈な決戰下、前線銃後の差別なく、憂國の情に於て、前線諸士に劣る筈はないのであるが、作品に遜色を見るのは、甚だ遺憾と謂ふべきであらう。

日清日露の戰役、その他の戰爭當時に在つては、戰爭を咏んだ句は甚だ乏しかつたやうに思ふ、あの頃は題詠を主とし、その課題に依つて而已作句した爲め、自然戰爭を句に扱ふことが少なかつた、それとまだ花鳥風月の諷詠を離れず、生活に卽することが乏しかつたのでもある、勿論兩役共に國を賭した大戰であつたけれども、句作人の關心がそれに及ばなかつたやうである、現大戰は眞に國家興亡の峻烈を極めた戰鬪であり、擧國決戰態勢に在るこの秋、吾等俳句日本の同人諸君が、只管に戰意昂揚の諸作を示されつゝあることは、洵に心强きかぎりである。

吾等は勿論時局認識に缺くるなき以上、その述作が直に聖戰に卽應することは當然であるが、自然を諷ふことなくしては、俳句はあり得ないのである、吾等も月に咏じ花に諷ふことを止めてはゐない、是を以て俳人は、花鳥風月をのみ詠ずることにのみ低徊してをると、相當の識者でさへまだ考へてゐるやうであるが、それは甚だ迷惑なことである、顧ふに俳句日本の同人には、左樣な消閑的な心得の人は殆ど無いと信ずる、吾々は決して趣味や娯樂に止まつてはゐない、吾々の句は心の奥底から滲み出る泉であらねばならぬ、月を眺め花を看、或は一片の落葉一箇の蕪に對しても、それに依つて表現さるゝものは、人生の憂ひであり樂みであり、哀みであり悦びである、吾等が定型に跼蹐することから離脫して、眞の表現に恰好な句型を擇べる所以も玆に在りと謂へる。

未曾有の國難に際し、吾等の憤激が感慨が、戰意昂揚の句となつて表はるゝ場合は勿論、たとへ一木一石の表現に在つてもその表現されたものよりも、寧ろ表現に當つての純正な態度が肝要であらう、若しも自由主義的な殘滓を存したり、細い神經や薄弱な私情に驅らるゝ如き氣持であつては、決して聖戰に處する俳句報國の道ではない、確固不拔の國民精神を堅持して、然る後不斷の努力を致すことこそ、殊に刻下吾等の精進すべき方途であらう。

各家近什

電線を張つて駈けてゆく兵なにか叫び合ふ秋の野
防火水槽を地に埋める沈丁はつぼみてあり二月
みなわが飛行機にて飛んでゆく海一面が朝霧

池原魚眠洞

皇統あきらか地の明けの春の大河

山田宗作

戰機對敵の日々太陽多野

邀へ撃つ一機二機千葉はうごかない

枯尾花そこから子が走る土手日南

山池のそこら凍て土の小徑傾き

福島一思

山萩の風が夕方阿蘇へ出て來た汽車

木村緑平

栗のおちるところ夜月の出るところ

木が月夜になる水音の前

月が阿蘇の秘を月夜にする杉の木

大根間引く私無の間引きする妻午後から日の照り

井出合水

薪割る男に歳暮と大松二本立木のままで（係少佐進級）

供出の薪割り人なくてあり雨さへ

作男強情に麥の幅廣薄播もなく

始めて生つた秘無栗をあちらこちら持ち歩く

南京豆收穫のまゝ處狹に蕎麥と

九貫十中花

井出合水

薪割る男に歳暮と大松二本立木のままで（係少佐進級）

供出の薪割り人なくてあり雨さへ

作男強情に麥の幅廣薄播もなく

始めて生つた秘無栗をあちらこちら持ち歩く

南京豆收穫のまゝ處狹に蕎麥と

九貫十中花

敵機見張る人も鷗らも朝霧の中に

米搗く音を月夜にした昔も、月夜米搗く音する

ものが讀めさうなほどの月かげ縁の端下駄に下りる

秋の日暮れるより船の笛机の上に開いてある本

丘は秋の日のかたむく島一枚一枚おのおの青葉

人が時計を見るので私の時計の時間

そこの驛から人らちらばりゆく銀杏葉のちらばり

けふこのところ蓮池は枯れて池のべの父と子

荷車をこゝにとゞめて見る冬の日大川の水

このとき馬蹄の音をきく木に秋空のあかり

寒さくる農人がくらしと竹の藪

佐々木石々

秋川の音のいつかは集り夜もある子供ら

ばく音の棒のつぼみ雪圍する

手足の皸も遠山はやつぱり雪だつた

どつたり、といふ米搗仕掛これに四五軒冬がくる

山の中奥のむさゝびのつゝ月夜きく

平賀星光

軍艦みなとへ入る鯆々として空も海も搖く

避所の山に登る自飛行機の遠い音

敵機襲來警報解除を冬枯山をはるかに聞く

海の中にて船燃ゆるに冬の星空　森　抱葉

冬の星耀く四ツが辻歩哨附剣で居る　武田露明

潟へつきいで枯葭の洲の遠かに切れて　蟲が鳴くだけの秋の海がぽつんとある

能州低く山凍てる陽の出でぎはを　佛の花をかへたら海鳴りを聞いてゐよう

ひとつぶえりの新米にしてみんな佛たち菩薩たち　風爽涼と秋の匂ひだ枯草だ

女工員えりまきせず髪の端の輕い毛玉を捌き　堀英之助　漬菜畑にとるに一日曇り土の黒き　渡部嫁ケ君

青木の實の赤い匂でも轉つてゐさうな雀の聲　吹かれて來た顔の溫氣車中双手双煩

牛の糞に霜のうつくしい播磨路は麥の芽に出る　枯れきつた草の日向たんぽゝ花一莖

訪ふてつつましいおくらしのしそが實をつけた枯れざまも（龍洞二句）　日の入る山も多木も茜雲なり合掌す　木戸夢郎

柿むく小刀が廻つてくるうしろを山にしてゐる椅子　杜にひとり樹を伐る篠に伏し篠に夜の來る

西さす雲の池のあれば一軒多　長屋青橙

一段きはだつところ山田の稻架あからさまに　木の葉のやうに一枚のはがき繪が書いてある

さるすべり古木多木に日のひかり楠公誕生地　藁塚積みあげ火をたきあげて月のない空

手とゞくところの蜜柑一つとり一つとり冬日の中　豆をこくほどの日南があつて丹波行のバスは出る

しもつき夕月の山のかたちみえ野川の水音　花とては山茶花の屋敷跡の石ぶみ讀めて

戰果に應へるこゝろにて正坐一家冬宵　原蝦煎子　太陽はいるところが變つてゐてつるし柿　池田亜杜子

道からすぐ湖に出て夕日の岸打つ波の水鳥　空が地が多木となるかげりが

雲から出た陽にほした繭縁の日南にかはいてゐる繭　休日を貫ひ家に窓打つ霰

岩にさす陽の日も短かく湖のさらさら波　こゝに立ちておん階多夜明けるにほひ

山の間湖が見えます峯に出た道の杉の木多　その整列神兵で夕燒ける

多山相かさなり偵察機なりし　井手逸郎

こども兩手をひろげて雞を追ふさま山家深秋

踏切こえてから家のよこが秋の雨ふつてゐる道

大根畑に月の明るい家を出てからの道

雲の中の月が刈桑はたけ刈桑に葉のある道

多山になり木馬にて木を下すとき月になり

鎌倉　白羊城

椅子と明るい白布に葡萄の一鉢

水のしたたる音は寛のそこら陽の影

葉を落した樹々は風のまゝ晴れて

鐵路を曲げて山ある山の紅葉

さんざん降つたあとの月が出てゐる八ツ手の葉

風間榮治郎

臺灣沖に快勝窓に大き迫り秋山

激戰いま野の空とほく秋雲ひろごり

空うごくなしびつしり稔り粟の穗たるゝ

こぞつて苦の穗を拔く搖れてゐるすゝきの穗

戰力こゝにもいつしんに苦の穗を拔いてゐる子供

井上一二

いふべ大戰果けふおまつりの山々もみぢ

出陣の子を思ひ挺身の子を思ひすこし醉ふてゐる

速記者が女で窓のそと木の葉があかく

神の日神の庭に籾干して訪ふてゐる

菜つ葉陽があたり兵隊さんうれしく外出

淺利小鍵

菜畑の方に聲する疎開の人たち安居

栗落ちる青毬も落ちてくる風の砂原

一處に生れこうろぎが鳴いてゐる一處草原

紅い桃の葉散つてしまふた地域となつた

秋の山へゆく人往還のやう集散しける

佐藤露江

村道を送られて征く一とすぢ道多木

障子をしろくしてはつ多湯わかしの湯氣も

濱の宿屋の屋根の草時雨れてゐる

涸れて川鳴いて笹鳴き多ふかし

稻垣一鳴

つやゝざくろ一つ二つありし日の木

追ふ汐白し何ヤ羽海猫白し

むかしいふた北國日和朝から小猫うつ

昨よりも晴るゝひるからの家ゐ咳（小妻持病）

こゝろはやりて暮れて窓も千住にて（上京）

中原我樂

まさに敵機の姿むかふ多晴るゝ浪

秋天ふかしけふ榮治郎とあるく洛北

鷹が峰の麓をあるく眞上多雲

雜木もみぢと杉の秀と深まりゆかむ

油菜と蕪菜と工場引込線眞直ぐ

柳田流矢

守り本尊さましづかに落葉してゐる

洗へば白蕪赤蕪車一臺供出

三時がなると暗くなるこなひき白の豆のこな

雪ふる中の矢竹といふ竹が一株

論語の素讀のころをなんとなく想ひ出して雪ふる

岸雅泉

五月海の碧さが軀にこたへる砂の冷たく
五月の海に對ふ沖から大きくうねつて碎けない浪
手甲の手をあげそれぞれの向きに稻束まるめる
かまきりがいのち腹ふとく草に
かやうに柚の葉の茂り低いくぐりから出て來る家人

高橋良太郎

み國の子としての教を聞く秋の日先生のぐるり
杉のおちばなどまだまだ雪のあとあめ
あられ消えぬ間の龍のひげの實なり
海がこまごま雪のかかりて小松原なり
雪に何か匂ふやうな枇杷さいてゐる

蓬萊鶯郎

草を飛びたつ小鳥どの徑のべも草の穗
一機一艦を屠る月低き入江芦の穗
疎開學童の足小さき新藁草履
戰果追加をきく夜霧流れ入る裏口
作業終了小松の芝の雜草を採る

田中井夢

山でみかんをたべて青い海ポンポン船
ほんのしぐれで稻を刈り稻を架けてゐる幼きも
石、枇杷の花にもかかる雨で
夜明けて刈田のむかう海がある車內のひと
月が山をはなれて月夜の刈田ぐるりの山

江島雨燈

なだら山畑山羊鳴く明けに紅葉まさりゆ
花壇球菜師走蝶かな戰果のきこゆ（日比谷二
陽霞立てど師走塔空頻冷えて
壕にネガホのどこしら燒け空點打す鐘
波狀襲る感ン壕に氷雨す耳トげし

宮林釜村

書庫の前朝寒の人ら立つ向々
榎落葉に打たれ小春日の男
八つ手の花わが手しもやけを見る日ざし
大根葉一霜來たやはらかさふる鄕
座ぶとんそのまゝに置く足袋ぬぎ揃へ

鈴木折嶺

光をもつとまあるい月が祭のたいこ
御遣骨還る橋の上まで並びて暮れ早し
前をいく兵隊さんみかん山のみかん豐作
多木暮れるといふ月となり、船の出て行く
花屋に出だすと命日買つてきて水仙を供へ

若林乙吉

疎開學童うたひ行くひとりひとり彼岸花さく
銀杏は木に生りしふるさとに來し
森多木すれば森が明るく遠山近い山
家から森の多木が見える鳥がゐて多木を去らず
山が根に腰する低きに湖ありたべものの冷え

和田光利

ふかいふかい井戸があり父の世から開拓したといふ

落葉松も散つたる二三軒へ雪山の相貌

戰果相次ぐ月夜のしづかなる松の木

餅つくおとさせてほすすきの中の家からも征く

栗は割れざくろははぜて七十にして鍬とつてをられる

高橋晩甘

花藜にどつと暮れてくる天

菊の花が咲きをの子を天の一方をおもひ

壺の小菊にかるい會釋をして坐り夫人

草のもみぢ傳書鳩おとなしくてしきりに瞬いてゐる

萩山吹枯れるものは枯れて多の庭やすけし

財馬呵歩

秋も急ぐと汗するほどな子の骨壺を

毎日の椅子へ毎日かけて木が空が秋になる

月が半分空にあるおとなりへ只今もどりました

箱作りの青菜が青くて街並弔旗

星空どの家も灯がついてゐる

加賀谷灰人

多の山の兄弟で働いてゐる炭竈

はや星の一つを多の山の炭竈

枯山にきてつきよとなる火を焚いてゐる

部落の灯を麓に星ぞら炭焼竈にゐる

土間の暗い灯をともし多の山から戻つてゐる

村尾草樹

寒夜の機械の照明電燈の溫みにふれる

征つたあとの機械に早人がかかつて戰ふ轟音

轟音とは別に爆音あり仰いでみるは多の雲

南晴星

沖も浪ありどつと碎くる浪にをる多日

松ひくゝありうすく空ありわが家多朝

木々紅葉し國の夜あけし早い朝飯

灯りて人家あり月あり多菜の畠

一念勝利どうだんあかきに炊ぎ

近木黎々火

すがたきよらか冬木朝日はんらん

月が枯れて出てをる

海が白い二階のラジオ日獨交驩

枯れて通る月に坂がある

雲にけふ月の壁が木の中

鈴木あつみ

乳房から乳がこぼれます山茶花に香がない

枕木置場からすこしはなれて竹山竹の春

刈田ひろびろあり次に爲すべきことがあるわれら

凍てつく水槽におもふ夜空におもふ雲あり

更に長い火叩を作るぞ冬菜もたべる

犬越吾亦紅

さらり雪きてひさしこの店の葉書一枚は賣る

くりやの大根くりやの灯にしろくて三本

霧を來て霧の映畫館へはいらうとする

床屋の時計がそこで夕飯の支度となり近所

この家に夕べの流せせらぎて流れ入る

句輯

その幹近く巨木銀杏多木立ち吾が壕
とまれ早朝の君に焚き落しの煙を充分
刈田犬ゆく暖あり鷗來る水場あり
多木の空敵憎し高し二機が去る
吾はも鐵兜して出づ家の四方多木立てり
渇き峠で柿を喰ふ冷たきに風も吹き上げる
さらば多榮の緑の如く強かれこの秋(章一郎入營)

秋山秋紅蕈

夜空ばくばく敵機來る光芒無盡
寒く星が窓に見え敵機一つは來てゐる
水仙の花白く向きあつて影する
手のみかんうつくしくみかん一つきりのいろ
學徒すがた並べ行く霜柱あさひす
大空の多が青い遠い音を訓練する
飛行雲を林木林坂となるそら

内田南艸

山畑は風速き麥ふむ人のうごき、

喜谷六花

山の小春の蜜柑もげば沖を船が通ふ
南方航路をよくも來たくろい貨物船多の日
決戰今朝はこゝの部隊も青い海をむかへる
銀河つくるところ敵機墜ちしと思ふ潮騒
おのれ敵機め妻は壕の子に牛乳をのます
雲をよろこぶ男の多は敵を撃つのだ

細谷不句

兵舍へゆきかへる林の中ところどころ小さい木黄葉
鵜の鳥ひくゝとぶ網に入る丸身の魚
銅像にはかゝはり無き人たちむらすゞめの木實り
神鴉われらが頭上にありありて霜旦
刈田の中小川がながれところ〴〵水あふれ國土
いなごが稻株の中ふかくゐ人ら兜を背にし
暖多いちにち一機を見ず大いなる空

内島北琅

新月山に落ちて行くこの夜敵機いまだか
敵機少數逋走したといふ夜の物皆氷る
月の雪の明り深夜のラジオ切らずにある
夜の雪がふる積もる又はいる東部軍情報
木から雪がちる鳥が飛ぶ雪空
月が雪があつて信越敵機遂に迫りくる
壺の模様になつて枯れて草雪ふるる

すべきはしぬ敵機墜ちろ地響く心待ち　朝倉九鵬子

書類金庫へ開あらば一信せんと

點白影B29めたゞに睨めてゐた

夜毎ごと裝ひ無灯師走を

ばくおん聞こゆかに凍る北斗星今夜も眞空

體爆よし吾らもゆくぞ事ごと

ねがはくこころも鎧へ纖兜どち　安齋櫻磈子

白い雞十羽あり一家歳晩

藁を打ち藁を打つ竹の春にある暮色

この身征かずに暮らすけやき多木の影

決戰家々乳穗あり井戸に水ありて冬の日

けはひ寬濶野焚火を離れ來し人々

農夫ものいふて去る多に朝に青々の芹田

積雪光ありどこまでも國護るこゝろ　奥村四絃人

むつくり起きる警報霜夜をゆすり

翼燈翼燈友軍の翼燈百星縫うて

壕の冷しんしん迫る敵機遠のく音

敵機去り百星またたくばかり

警報解除身仕度のまま夜具をかむる

敵機致命の煙吐いて初多の日のまばゆさ

砲煙ほかほか消え殘る初多のくもなき空　松宮寒水

そら豆の種子貰ふ一握り雲うつくしい

龍膽の花うごかない大鳥がみゆる煙がみゆる

小鳥網散り葉にふくれそこに青鳩一羽

くれてから隣の子持つて來た冬菜一つかみ

山頂雪少しあり柿の木柿の實

よるひる籾臼を挽き仕へまつるこゝろ

伊勢の海の日のいろと大根畑　古林巴水樓

富士に雲のある秋の川波いたくも濁り

影のやうな鳥が山茶花朝の木の中

灯が夜になつてきてさくら

地雨になつた傘さして行くに樹の中

小鳥が居る深い木の奥にある道（大陸行三句）

曇れば畑土も黑い多木の鴉

圓坐し羊をあぶり寒天の星を酌む　妹尾美雄

日に敵機來るまともにわれに來るが冬空

一信を山の子供に送らう氣持多の日

敵機が墜ちてゆく鹿島灘多浪

B29に身を向けて立つわれら冬の日
月と敵機と霜柱踏む
敵機旋回す多夜雲立ち
水仙を剪つて來て女の子防空頭巾

林雀背

鶺鴒つゝとぶ木々決戰の烏瓜まつか
警報鳴りやみわが前たつ富士どつしり
征く日待つ子の瞳鳩の旋回を追うてゐる
富士雲にそびゆまた體當り機がつゞき
來て敵機たゞ雲かき亂す地に野菊咲き
山茶花咲く空けふも遁走の敵機のこした雲
すがしけさは富士たかく屋根屋根ならびて霜

伊東俊二

やはりそのお巡りさんがゐる交番のところから坂の冬木
隣のラジオも警報解除の遲い寒い月が出る
休電日といふ顏の伸びた髭で出てゐて子の豆凧
昔なら乞食がゐたらうからつ風のかげの木のかげ
無線塔の骨格の夕日一機ゆく冬
元日にきたはがき四五枚の用事ひるから道へ出てゆく
君の父上君を送る小旗言葉かける人に向く

荻原井泉水

こどもに宿の庭をきれいである鳥を教へ元日
女の子なら羽子ついてゐる音がうちの子
水音と堤とは遠くにけさは羽子ついてゐる空
こどもと、こどもは年一つとりましたみかん
霰のあとの夕日が枯山、山のひだ
警報けさは無いとうめいな空の梅の蕾
霜はりつめた朝の、と御製奉誦その時間

中塚一碧樓

勝利を約束す空廣く霙ふり來る
冬木に手をふれこの時しもおもふわが國
高きところ多の日の榊一枝を供へ
冬はじめ本幾册かを求め重きをもてり
空襲多の日の大河の水の流れ
多日松の木に敵機あきらか墜つる
桶の氷を割り几邊を淨め

西垣卍禪子

防火砂を干しやはり正月のすこしは青い畑見え
月夜庭先から畑々葱の横列灯をもらすまいとす
聽け神鷲の鬨げに多の夜のみ民われらも
けふまるきり來ない敵機遠く刈田の灯
松下村塾のくだりそら讀む積む程の雪を母のそばがよくて
子供ら鐵兜の雪蟲を拂つてくれ壕の上の雲
待機の向ふ刈田が廣いわれ群長腕をくむだ

有隣亭蔵書

編輯後記

○必勝不敗は我が皇國民の一大信念である。俳句人にあつても皇民として悉く天皇に歸一し奉り、我を忘れ己を虚うして、大和一致の大義に生きぬく時こそ必勝不敗の信念は顯現する。勝利の日が近づくにつれて、身邊に敵機の來襲はげしくなるであらう。だが斷じて恐るる必要はない。不敵の皇軍に萬全の信頼をかけて我々は只管職域挺身して敵米を破碎しようではないか。一方、我々が此大決戰中に用紙の配給を受け昭和廿年を迎へ得たに就いては、大東亞建設に、また、總親和總努力の眞に大和一致の昂揚に、本誌の果さねばならぬ役割を感ぜずにをられない。我らは新春を期して確乎たる決心を新たにしよう。

○近時わが詩歌は戰線に於いて未曾有の盛況を呈してゐる。畏くも皇太子殿下にあつては特に短詩の意欲的な希求を痛感するものがある。それは、短詩が日本民族の明朗なる感謝に堪へない、氏の「俳味」探の本筋だとするのみばかりではなく、戰時下に於ける我らの生活は、さわがず、あせらず、落着いてあらねばならぬ平常の心を恒に持ち續ける意味に於いてである。然し、俳句が本來傳承する自然諷詠の性格といふ大空の雲を大地の草を讀ふ俳句に就いては見直さねばならない。それは、自然に對して訴へるといふ事と、自然と共感するといふ態度とは異るからである。後者にあつては、みづからを抑へて生かすといふ短詩の機能を、俳句は自然の雲をまた草木を詠ふものと性格づける舊觀念と、作品的概念とを先づ排除しなければならぬ。そこには「日本的な心構」「大自然を魂とする」といふ日本的美に就いての反省があり。そして、建設的なる行爲の俳句が大空の雲を讀へても現實の實相把握である戰爭俳句の誕生を意味する。怒號を羅列し士氣昂揚とする戰爭俳句とは大違ひの根源にある事を知らねばならない。

○日本出版會雜誌部の寺澤氏から無理を云つて原稿を頂いたことは明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

稿は誠に新俳句壇に投ぜる一波紋と云ふべく、新しき俳句の動向をとらへ來つて、俳句に於ける復古が如何に時代の息吹となつて顯現道交してゐるかを提唱してをられる。得る所多しと云へよう。（卍禪子）

投稿略規

俳句日本作品

荻原井泉水選のものは世田谷區松原町一ノ八三伊東方へ
中塚一碧樓選のものは世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧樓へ
西垣卍禪子選のものは足立區伊興町狹間八八七西垣卍禪子へ

○句數十五句以內、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿一選者に限る事。

一、締切　毎月十五日

一、購讀誌代の拂込は從前通り舊各誌の發行所宛に願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と

本誌定價

一册分　金七十錢（送料二錢）
六册分　金四圓二十錢（送料一錢）
十二册分　金八圓四十錢（同）

・前金（なるべく振替）で御拂込下さい。
・必ず何月號よりと御指定の事。
・御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷　第八號
昭和二十年一月廿五日印刷納本
昭和二十年一月三十日發行

發行人　中塚直三
編輯人　西垣隆滿
印刷人　檜山公一
東京都小石川區諏訪町五六
印刷所　株式會社　常磐印刷所　東京二六
東京都世田谷區松原町一ノ八三
發行所　俳句日本社
振替東京一七六〇六四番
日本出版會會員番號一一五〇〇四
配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

定價金七十錢